
いとしのプリンセス

じゅう・かわせみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いとしのプリンセス

【Nコード】

N2604N

【作者名】

じゅう・かわせみ

【あらすじ】

魔族と人間との大戦争は、二人の勇者によって魔王が打ち倒されたことで終結した。

それから1年後、勇者に憧れる平凡な傭兵がその余波を受けた事件に巻き込まれることになる。

（全13話）

ひとつの戦いの終わり（前書き）

作品舞台は王道のファンタジーRPGのような世界を想定しています。

ひとつの戦いの終わり

長きにわたった魔族と人間の戦争、通称「魔大戦」は今まさに重大な局面を迎えようとしていた。

数では劣るものの、膨大な魔力を駆使する魔族の軍勢に人間側は苦戦し、次第に劣勢となっていた。そこで採られた逆転の策が、魔族軍を率いる将である上位魔族たちの暗殺であった。その危険な任務にあたった者を人々は勇者と呼んだ。

広大で無骨な作りの宮殿の廊下を、軽装鎧姿の招かれざる二人の客が駆け抜けている。

ここは上位魔族たちの頂点に立つ魔王が居住する城。その玉座へ向かっているのは数多の困難と戦闘をくぐりぬけてきた二人の勇者であった。

「エレン、さっきの傷はもう大丈夫か？」

勇者のうちの男のほうが女の勇者に語りかける。

「ええ。体力はもう、完全に回復しているわ。ハンディなしで魔王と戦えそうよ」

エレンと呼ばれた女勇者は小手をずらしてほとんど治りかけている傷跡を見せる。

「自分らの身体ながら、恐ろしい回復力だな」

「でもこの力があるからこそ、魔王と戦える。……勝ちましょうね、アルゴ」

「ああ、俺達は負けるわけにはいかない。この力は俺達だけのもの

じゃない、みんなの願いが込められたものだからな」

彼らは伝説で予言された勇者でも、勇者の血をひく人間でもなかった。彼らは上位魔族を倒すためにタイラン王国の魔道実験室で進められた「精霊戦士計画」によって作り出された人造の勇者であった。

その計画とは、人間の体内に四大元素である地、水、火、風の精霊の力を注入し、通常の魔法使いが使用できる以上の力を発揮させるというものだった。

だが、普通の人間に精霊の力を注入しても精霊の力は暴走し、その人間を死に追いやってしまう。そこで二つの案が考え出された。

一つは伝説の霊薬エリクサーを精製して普通の人間に飲ませ、精霊の力に耐えうる肉体にすること。もう一つは初めから精霊の力に耐えうる人間を探し出すことであつた。二つの案の実行は同時に進行的したが、エリクサーの精製は間に合わなかった。しかし、魔法使いの水晶球占いによって特別な人間は見いだすことが出来た。その候補者は、数十人程度いたが、その中でも特に優れた潜在能力をもっていたのが、この二人の勇者だった。

一人は片田舎のムーア村の青年アルゴ。もう一人はウェアリン王国の王女エレン。二人は魔族軍から人々を守るためにと、精霊戦士計画に積極的に協力した。

だが、その彼らでも4つもの精霊の力には耐えられないと判明した。そこでアルゴには火と風の精霊の力を、エレンには地と水の精霊の力を与えたのだった。

こうして精霊戦士となった彼らは勇者を名乗り、人間側が苦戦する戦場の上位魔族を倒し、そしてついに魔王の住む城へ向かったのだった。

「私達は、精霊の力を行使できるという運命を背負った人間なもの。魔王を倒さなければいけない」

「運命、思えば不思議な運命だなあ。一国の王女様となんて、一生顔も見ることもないと思っていたのに、今はこうして同じ立場で肩を並べている」

「でも嬉しかった。私は王女という立場上、同じ視線で戦いを共にする人がいなかったから。あなたと出会えてよかった」

「俺も。女の子は守るだけの存在じゃないって知って嬉しかったよ。俺は本当は、こうやって一緒に戦ってくれるような子が、好き、なんだ」

「ふふっ」

決戦前に目で微笑みあう二人――。

二人は謁見室の扉を開けた。長い絨毯の先の玉座には、彼らが倒すべき最強の敵が座っていた。周りに他の魔族はいない。その泰然とした態度は彼らを待ち受けていたことが明らかだった。二人はそちらへ向かう。

魔王はゆっくりと口を開いた。

「来たか……勇者達よ。魔族と人間、互いに相容れぬ存在であるならば、どちらかが滅びなければならぬ。私は魔族の王として人間を滅ぼす。その邪魔をする者は許しておけぬ。勇者達よ。勝負だ」

魔王は玉座から立ち上がり腰の剣を抜いた。同時に勇者達もそれぞれの武器を抜いた。

「■■■■！！」

魔王が人間のものではない声を発した。利き手でないほうの手から赤黒い魔法の火球が放たれ、アルゴに向かう。それは戦闘開始の合図だった。

アルゴは剣でそれを弾き飛ばし、そのまま振り上げた剣に呪文を唱えて雷光を発動させる。電撃に一瞬ひるんだ魔王の隙を狙ってエレンの鉄槌が振り下ろされる！

だが魔王は易々とその一撃を受けとめ、一旦剣を収めると今度は両手から同時に衝撃波を飛ばした。アルゴの集中が途切れ、エレンは体ごとひっくり返る。すかさず魔王は倒れた彼女の方へ駆け、蹴りあげると、その身体をアルゴに命中させる。アルゴは体勢を立て直すいとまもなく、二人の勇者は重なって床に倒れこんだ。

「遊びはここまでだ。我が腹心アイゾンを倒した勇者がそれっぽっちの力しか持たぬわけがない。私もそろそろ本気を出す。今が私を油断させようという演技ならば意味はないぞ」

魔王が挑発する。しかし、勇者達は言われずとも、己の肉体の中の精霊の力を開放するところだった。二人の体が鈍く光りだす。その様子を見た魔王がニヤリと笑ったのは戦いを好む彼の血のせいであらうか。

かけ声一閃、戦闘が再開される。

……そこからどのような戦いが繰り広げられたのか、知るものは戦いの当事者だけである。

だが、魔王の城がそびえる山の麓で魔王直属軍と戦っていた兵士たちが、朝日を背にこちらへ向かってくる二人を目にし、その疲れきりながらもやりとげた表情を見て、彼らの勝利を確信したのである。

勇者が魔王を倒して凱旋し、夜通し行われた祝いの宴も終わり、空は白み始めていた。

勇者を含む精霊戦士計画の主要メンバー6人が密かにタイラン王

国魔道実験室に集まっていた。

「ふう。せっかく魔王を倒してみんな喜んでいる時なのにこちらは
お別れの時か。寂しいねえ」

女性的な面立ちの青年・ルタオンが残念そうにつぶやいた。彼は
あてもない旅を続けていたとき、ひょんなことから計画に協力する
ことになった吟遊詩人である。彼は訪れた様々な土地で聞き集めた
伝承を基に、アミザール遺跡に行って霊薬エリクサーの謎を求めた。

「みんなともしばらく会えなくなってしまうけれど、俺達は、いつ
までも仲間だぜ」

ルタオンはメンバーひとりひとりと握手をし、じゃあな、と手を
振りながら挨拶し去って行った。

「じゃあ、俺もそろそろ行くわ。みんな、またな」

そう言って手を挙げた眼鏡の男は技師のミューラスである。若き
天才発明家である彼は魔大戦のおり、魔族に対抗できる、科学と魔
法の双方を利用した兵器を開発して戦いを補佐した。タイラン王国
軍には馬のいない自動戦車を、二人の勇者のためには人や風の力
を借りない船を供給している。また、メンバーの中ではムードメー
カーであり、いつも軽口を叩いてメンバーを和ませていた。

「ミューラスはどうするの？　これから？」

エレンが聞いた。

「ま、今までと同じさ。どこか目立たないところで発明をつづける

よ」

彼は後ろ向きに手を振りながら去って行った。

「エレン、いえエレン姫。やはりあなたはウェアリン国へ戻られるのですか？」

そう言ったのは計画のリーダーであるタイラン王国宮廷魔道士のサクラだった。長年の魔法の研究生活により肌は荒れ、髪の毛は痛み、彼女はまさしく魔女というべき容姿をしていた。

サクラに尋ねられたエレンはこくりと頷いた。

「ええ。本当はみんなと一緒に姿をくらませるのが一番よいのでしようけれど、現在父王の子供は私一人。私は王国を捨てるわけには参りません」

「そうですか。いや、王女としての責務については私は意見出来る立場にはありません。貴方の判断におまかせします。では私は行きます。キース、いくぞよ」

そう言ったのは浅黒い肌をした少年、キースだった。彼の正体は人間の数倍の大きさの体を持つ若いドラゴンであり、少年の姿はサクラの魔法によるものだ。人間と魔族の戦いにおいて、ドラゴンは中立の立場であった。しかしキースは数十年前サクラに命を助けてもらって以来、一生をかけて恩返ししようと彼女の助手となったため人間側に味方することとなる。サクラは魔法実験をするときにはキースを人間の姿に、高速移動が必要な時にはドラゴンの姿に、と使い分けていた。

「はい、サクラ様。……エレン、アルゴ、元気だね。僕はこれから人間としてサクラ様についていくよ。それじゃ」

そして勇者二人が残された。しばらく二人は沈黙したまま見つめあった。

「それじゃあな。エレン」

アルゴは耐えきれなくなり背を向ける。だが、一步を踏み出しかけたとき、エレンから悲鳴のような声が発せられた。

「待って！ アルゴ」

エレンはアルゴに駆け寄り、その背中にすがりついた。

「やっぱり私、アルゴと一緒にいたい！ 離れたくない！」

「エレン……」

「連れて行って。アルゴ。私をあなたの行くところへ」

アルゴは振り返り、エレンの肩を抱いて言った。

「エレン、俺だってエレンと同じ気持ちだ。でもそれはできない。みんなで決めたことじゃないか。俺達と一緒にいるのは危険なんだ」「分かってるわ。でも……」

「エレン、いつか、すべての問題がクリアされたときには必ず君のところへ行く。約束するよ」

「本当？」

「ああ」

二人は長くも短い抱擁をする。長い別れの前の大切な思い出だった。

そして、1年の月日が流れた。

ひとつの戦いの終わり（後書き）

習作です。あまりに評判が悪ければとっとと引っ込めます。そうでなければ1日1話のペースで全12話をUpしていきます。

消えた幼な子（前編）

ウェアリン王国城下町は、魔族の襲撃による傷跡はすっかり癒え、町は平和でにぎやかな日々が続いていた。ウェアリン王家には代々、森を大切にせよという家訓が伝わっており、城下町には樹木や草花が多い。それらのおかげか、町の人々の性格は穏やかで優しい。

城内でもまた、明るい笑い声が響いていた。それはこの国の王女エレン姫が青空を天井に侍女達とお茶会を楽しんでいる姿だった。エレン姫といえば、幼い頃はとんでもないおてんばで、王やお付きの人々を悩ませていたが、1年前、勇者となって魔王を倒してから、一生分暴れ尽くしたとでもいうかのように、しとやかな女性へと変わっていた。

最近ではタイラン国の王子との縁談が持ち上がったが、彼女はそれをきっぱりと断った。ウェアリン国の人々はその理由を、もう一人の勇者アルゴのためであろうと噂した。

「ああ、姫様、可愛いなあ」

ウェアリン国の一般市民、ムーザッパは遠眼鏡越しにエレンを遠くに見下ろしながら嬉しそうにつぶやいた。彼がいるのは城壁を取り囲む背の高い木の枝の上である。要するに彼はお茶会を覗き見しているのだ。彼は幼い頃偶然出会ったエレンに一目ぼれして以来十数年、ずっと彼女を思い続けている。

「美しいブロンドの髪、碧色の瞳、健康的に日焼けした肌……、あんなにきれいで華奢な体の中には魔王を倒してしまうぐらいのパワーが秘められているんだからなあ、あこがれちゃうなあ」

彼にとってエレンの何もかもがいとoshかった。昔のように棒き

れを持って暴れまわる彼女も、今のように上品にお茶を飲む姿も。

ムーザッパはうつとりした顔でエレンを眺めつづける。すると――

「こらっ!! ムーザッパ! またここに来てたの! 降りろっ!!」

至福の時を邪魔する声が木の真下で聞こえた。ムーザッパはそちらの方向を見たが、見ずともその声が誰のものであるかは判っていた。幼なじみのルタミナだ。彼は舌打ちすると、仕方なく木を降りていった。

下では怒った顔の男の子……否、女の子が手を腰に当てて待っていた。そばかすだらけの顔にショートヘア。おしゃれをすればなかなか可愛い女の子になるはずだが、活動的な、男性的な服装が彼女の美しさを隠していた。

「あのねえ、ムーザッパ。いいかげんに覗きはやめなよ。戦時中だったらスパイ扱いだよ?」

「今は平和なんだからいいんだよ。なんぴとたりとも俺の姫様への想いを止める権利はないっ!」

ルタミナは肩をすくめる。

「まーた恥ずかしげもなくそんなこと言うし。いつものことだし、まあ、いいけどね。ムーザッパ、仕事よ」

「あ、仕事?」

ムーザッパの父親ガルガニスは傭兵斡旋所の所長を勤めている。力ある魔族が倒されたとは言え、世界は完全な平和になったわけではない。魔族の残党、土着の魔物や凶暴な野生生物、はたまた人間

の盗賊集団など、小さな恐怖は尽きない。

ムーザッパやルタミナもそこに登録された傭兵である。二人は幼なじみだということもあり、ガルガニスによく彼らをコンビにして仕事をさせている。

「で、どんな仕事なんだ？」

傭兵斡旋所への道を歩いて戻りながらムーザッパはルタミナに尋ねる。

「うん。シザの村で五歳の女の子が行方不明になったんだって。依頼者はその女の子の父親。女の子を探し出して連れ戻してほしいってさ」

「事故とか、誘拐とかか？」

「それを調べるのが私達の仕事。詳しいことはおじさんから聴いて」

そして二人はガルガニスから詳しい説明を受けると装備を整え、シザの村へ向けて出発した。

すると、城下町の出口の南門に新しい公示板が貼られているのを見つけた。この公示板は町の人通りの多いところに貼られているもので、年中行事の日付などの連絡がなされている。

「何かしら？」

「何だろ……あっ!!」

ムーザッパは突然目を輝かせ、公示板へと走り出した。ルタミナもその後を追う。ムーザッパが公示板を凝視する横から彼女もそれを覗き込んだ。

「え……何々、ウェアリン国復興記念およびエレン姫様の誕生パー

ティーがさ来月9日開催、ね……」

「ああ……。俺も何か姫様にプレゼントしなきゃな……」

ルタミナはそんな相棒にため息をつく。

「まあ、好きにプレゼントしていいけどさあ。姫様は、プレゼントなんてそれこそ、何百何千と贈られるんだから。ムーザッパのなんてほとんど見てもらえないと思うよ」

「何がいいかな。花がいいかな？それともアクセサリー？」

「聞いちゃいないし……。ムーザッパ！とにかく、それは仕事が終わってからね」

町を出てしばらく歩くとムーザッパがつぶやいた。

「どうしようかな……」

「何が？」

「さ来月9日。その頃に仕事入ったらどうしよう。休みもらおうかな。プレゼントもいろいろ考えたいし、どうやったら姫様にアピールできるか、ルタミナ、どう思う？」

「おまえはあ！」

ルタミナは旅の道具を入れる小袋を中身が入った状態でムーザッパの顔に叩きつけた。

「わぷう」

「目が覚めた？」

「……」

「あんた、傭兵の仕事についたとき、言ったでしょ？ 武術を身につけて、困っている人達をたくさん助けていくんだ、って。そうして、姫様と少しでもつりあいのとれる男になるんだって。ね？ プ

レゼントで気を引くつても、一つの方法としてアリだけど、それよりも自分自信を磨いていくのが大切なんじゃないかな？ ……これが一応女の私からの意見」

「……うん、すまん。目が覚めた」

「じゃ、仕事に集中しましょ。行こう」

夕暮れ時に二人はシザの村へとついた。シザの村は海に面しており、漁業が中心産業である。村には潮の香りが漂っていた。二人はガルガニスの書いてくれた簡単な地図を手に、依頼主のゴスパーの家へと向かった。とは言え、網元であるゴスパーの屋敷は他の漁師たちの家と明らかに装いを異にしていたのでたやすく見つけることが出来た。

「おお、あなたの方が約束していた傭兵ですね。お待ちしていました。さあ、こちらへ」

質素ながらも上品な装いをした中年の紳士ゴスパーは二人を奥の部屋へ案内する。

「いったい、リリアは今どこでどうしているのか……」

テーブルにつくと、ゴスパーは自分がいかに娘を愛し、今どんなにつらいかを熱く語った。ルタミナとムーザッパはそれよりも、いなくなった時の状況を詳しく聞きたかったが、依頼者の機嫌を損ねてもしょうがないので我慢する。

「その日の朝、目覚めたら隣のベッドで寝ていたはずの娘がいなかったのです」

「娘さんのベッドが乱れていた様子は？」

「ありません。ごく普通に娘が寝ていたという跡があっただけです」

「前の晩に何か不審な様子は？ 屋敷や、娘さんに」

「それは……なかった筈です。私も使用人に聴いて回りましたが、誰かが侵入した様子もありませんでしたな。ああ、使用人たちは古くからいる、信用できる者たちばかりです」

ムーザッパとルタミナは顔を見合わせる。娘が無理矢理連れ去られたという形跡はない。だとすれば娘が自ら出ていった考えられるが……？

「娘さんが最近不審な人物と接触していたとかいうようなことはありませんでしたか？」

「いや、そのようなことは考えにくいですな。リリアは先日うちに帰ってきたばかりだったんです」

「帰ってきた……というと？」

「実は、娘は魔大戦のおり、魔物にさらわれ、ずっと行方が知れなかったのです」

そう言うと、ゴスパーの顔が歪んだ。

「命は無いものとあきらめていましたが、ふた月ほど前に、旅の冒険者が魔物の洞窟を探索中、捕らわれていた娘を助け出して、連れて帰ってきてくれたのですよ」

「そんなことがあったのですか」

「だというのに……」

ゴスパーは顔を覆う。

「もう二度とあんな思いはしたくなかったのに。帰ってきたと思ったら、またいなくなってしまうなんて……」

娘の父親は人目をはばからず泣きだした。これ以上は話を聞けぬとふんで、二人は彼にいとまを告げ屋敷を出た。

既に日は沈んでいたので二人は今夜泊まる宿屋へ向かう。部屋を取ると、宿屋の一階の食堂兼酒場で夕食を取る。そのついでに、客たちに娘の失踪前後の出来事を聞いて回った。しかし、ほとんどの客には酒が入っており、大した情報は聞けなかった。

「ルタミナ、本格的な搜索は明日からになりそうだな」

「そうね、じゃあ今日はゆっくり休みましょ。お休み」

次の日の朝、ムーザッパとルタミナが宿屋の食堂で二人だけの朝食をとっていると、宿屋の主人が近づいてきた。中年の頭が禿げかかってがっしりとした男だ。

「あんたたち、ゴスパーがやとった傭兵だったんだな」

「ああ、そうだけど、何か？」

「大変だな、あんたらも。もしあの子が見つからなきゃ、あんたら、一生あいつに恨まれるぜ」

「一生って……」

「それくらい、娘のことになると、異常に感情的になるってことさ」

宿屋の主人は昨日は無口だったのに、今日はやたら饒舌だ。

「ゴスパーのやつはよ、娘を溺愛してるんだよ。だけどそのせいでちょっと頭がな」

と、彼は自分の頭を指差して言った。

「魔大戦の頃、あいつ、娘を魔物にさらわれたショックでおかしくなっちまってよう、どこかで娘そっくりの人形を作らせて家に飾っ

てたんだ」

「えっ!？」

「気味の悪いくらいそっくりな人形で、ゴスパ―はそれを本当の娘のように扱ってたんだ。あの頃のあいつには、ちよつと近寄りがたいものがあつたな」

二人とも絶句し、顔を見合わせる。ルタミナはその光景を想像して嫌悪感を覚えるが、それを押さえながら訊いた。

「でも、娘さんは帰ってきたんでしょ。そしたら……」

「ああ、それであいつも正氣に戻ったんだ。人形も海に捨てたらしいぜ。でも、また今度の事件であんなことの繰り返しになったら……くつ、ぞつとしねえなあ。頼むぜ、あんたら」

「……」

身支度を整え直した二人は村人たちから聞き込みをして回ったが、この村の人たちは就寝時間が早く、夜中の出来事を知る者はなかった。しかも、既にゴスパ―やその使用人から同じことを訊かれた後で、ムーザッパたちに快く答えてくれない者も多かった。手がかりが得られないまま昼になり、一休みすることにする。

宿屋の主人から、この村一番の眺めであるという海を見渡せる崖の上へと向かった。潮風が心地よく、午前中のストレスを吹き飛ばしてくれる。

腰を下ろして食事にしようというとき、ルタミナの悲鳴が上がった。

「きゃっ!」

「あ、あぶない。ルタミナ」

強い風が通り、ルタミナの持っていたハンカチがさらわれた。反

射的に追いかけてようとするルタミナをムーザッパが止める。

「崖だ、危ないぞ！」

「あーあ、落ちちゃった。結構気に入ってたのに」

ルタミナは海に落ちて行くハンカチを恨めしそうに見下ろした。
ムーザッパも一緒になんとなく崖下の海を見下ろす。

「なあ、ルタミナ。リリアだっけ、その娘、海に落ちたかさらわれた可能性が高いんじゃないかなあ」

「でも、夜中ベッドから抜け出して、真っ暗な村の中を歩いていて海まで行くかな。5歳の子供が」

「うーん、でも小さい子だからこそ予想もつかない行動を取るってことがあるし」

「ゴスパーさんは網元だけど、村の人たちから特に恨まれている様子もなかったわよ？」

娘が行方不明になっている間、精神を病んで気味悪がられていた時期はある。しかし、それも過ぎた話だ。哀れまれこそすれ、その状態に彼を戻したいと思う人物はいないだろう。

ルタミナはゴスパーのゆうべの様子を思い出す。確かに、娘の話をしていて彼の目は熱っぽく潤んでいた。聞いていたときは悲しみによるせいだと思ったが、宿屋の主人の話を聞いた後だと気になっ
てしまう。あれは狂気の世界を垣間見た目のように思えてきた。

狂ってしまうほど人は人を愛せるものなのか？

あれが真実の愛なのだろうか？

彼女にも愛する人がいる。魔大戦のどさくさで現在行方不明になっている彼女の兄だ。しかしルタミナにはそこまで身を焦がすよう

な想いはない。

ルタミナは自分とゴスパーを比較せずにいられなかった。そして目の前のムーザッパのことも考える。彼は普段は真面目で頼もしい青年だが、エレン姫のことになると途端に何もかもを忘れて駄目人間になってしまう。

どうしてなんだろう？ 愛のせいだというの？ そんなものが愛なの？ ……分からない。

ルタミナはムーザッパを軽くつつき、搜索の続きを開始することにした。

崖を引き返し、浜のほうへ歩いていく。風は穏やかで寄せては引く波の音が心地よい。海岸線ぞいに数隻の漁船が並んでいた今日は漁の日ではないらしい。浜では、兄弟らしい二人の男の子がいて、砂浜の上に散らばった物について、年上のほうが年下のほうに何か教えている。

お兄ちゃん……。

彼女は心の中で呼びかける。

彼女の兄、ルタオンは魔大戦の始まる少し前、吟遊詩人になるんだと家を飛び出し、それっきり音信不通である。魔大戦の折には城下町に魔物が襲来してルタミナの両親も殺され、彼女は天涯孤独になってしまった。ガルガニスは彼女に自分らと一緒に暮らさないかと申し出たが、彼女は首を横に振った。兄を待っていたいから、その申し出を受けてしまったのは兄をあきらめてしまったみたいで嫌だから、と断った。

お兄ちゃん、今どこにいろの？ この海の向こう？ お願い、一度でもうちに戻ってきて。

「ルタミナ？」

「あ、ん？」

ムーザッパに呼びかけられ、ルタミナは我に返る。

「何か海のゴミが結構散らばっているね」

ルタミナは物思いを振り払うために辺りを見回す。

「ああ、これ、潮の満ち引きのせいだろ」

「あ、そっか」

ウェアリン城下町には海から運河を引いて港を作っているので満干は知識として知っている。しかし、浜はないのですぐには連想できなかった。

「あれ？」

先ほどまで自分たちが座っていた海岸の崖が、それまでと違う様相をなしていた。崖の下方にはそれまで見えなかった大きな穴が口を開けている。

「ムーザッパ、あれ、洞窟！」

「そうか、今、引き潮だから！」

二人はそちらへ向かいかけた。しかし砂浜は崖に近づくにつれ磯浜となり、ごつごつとした岩場は歩いていくのには困難だ。

「どうだろう、探索する価値はあるかな」

「やるだけやってみましょ」

「あっ」

小さく声をあげ、ムーザッパはその場に屈んだ。

「何？」

「ほれ、おまえのハンカチだ」

「あ、ホントだ」

塩水でぐしゃぐしゃになっていたものの、それはまさしくルタミナ愛用のハンカチだった。ムーザッパは崖を見上げ、またハンカチを見た。

「そんなに流されないうちに拾えてよかった」

「なあ、ルタミナ、推測なんだけど、うん、もし、娘さんが海にさらわれかけたとしても、潮の流れで沖に行ってしまうより浜に戻ってくる考えたほうがいいかな」

「でも村の人はリリアの姿を見ていないということは……うん、あの洞窟、調べてみる価値はありそうね」

二人はゴスパーへの経過報告を兼ねて屋敷へと向かった。

消えた幼な子（後編）

ルタミナとムーザッパはボートを借りて洞窟に向かっていた。

『崖下の洞窟？ ええ、知ってますよ。この村の人間なら誰でも知ってます。あそこには村の海神様を奉った祠があるんです。もちろん私もそこを調べましたよ！ しかし、何もありませんでしたよ』
『え？ 人形ですか？ ああ、お恥ずかしい。誰かから聞いたのですね？ あれは娘が帰ってきたときに海に捨てましたよ』

屋敷で聞いたゴスパの言葉を思い出す。

あの洞窟の中には特に何もなかった、ということだった。つまり、人形もなかったのだ。もちろん、ルタミナのハンカチが波にさらわれなかったから人形もさらわれないはずだと決め付けるのは短絡的である。

だが、娘もいなくなった、そして娘にそっくりの人形も無くなったということに、ルタミナは何らかのつながりがあるような気がした。

ボートを岩に止めると、二人は必要な装備品が入った革袋を身体にくくりつけ、一旦海の中に潜って、洞窟の入り口をくぐった。入り口からのわずかな光を頼りに革袋から折りたたみ式ランタンをとりだして火をつけ、奥へ向かう。

「あ、あれが海神の祠かな？」

しばらく歩くと開けた場所についた。その場所の真ん中辺りにその祠があった。

それは神殿をミニチュアにしたような形をしていた。中にはご神

体の像が入っているはずだ。ルタミナは辺りを見まわすと、祠に近づいた。

ゴスパーは何も無かったと言っていたのに、祠の周りには何やら魔法の道具らしきものがいくつか散らばっていた。ルタミナは思うところがあつて、祠の天井部分に手をかけた。

「おい、何をするんだ、ルタミナ。バチがあたるぞ」

「ねえ、ムーザツパ。ゴスパーさんはここを探しても何も無かったって言ったでしょ。でも、本当に全部探したのかな？ 村の人だから、こういう神聖なものにまでは触れなかったんじゃないかな。もし、私のカンが正しければ……」

「お、おい。ルタミナ……、わあっ！！」

途端にムーザツパは叫んだ。声が洞窟内に響き渡る。無理もなかった。祠の屋根を取り外すと、そこにはぼろきれのようなものを口に詰め込まれた女の子が無理な体勢でつめこまれていたからだ。

「ムーザツパ、手を貸して！ まだ、生きてる！」

少女はくぐもった声をあげた。

「あ、ああ。酷い……！ いったい誰がこんなことを……！」

「とにかく、この子を助けるのが先決よ」

その時。

——誰！？

洞窟の陰から奇妙な声が上がった。耳を通じてではなく直接頭に響いてきたような奇妙な感覚だった。

声のした方向を見た二人は同時にあつ、と声をあげた。そこにしたのは祠に詰め込まれていた少女と同じ姿をした少女が、否、よくみるとそれは少女の姿をした――。

「人形!?!」

「人形がしゃべっている!?!」

人形の姿をみとめた少女は、恐怖で衰弱した身体をギュッと縮める。

――私の邪魔はさせない!

その声が頭に響いたかと思うと、人形は宙に浮き、リリアのほうに向かって突進してきた。

「くっ!」

とつさにルタミナはリリアをかばい、ムーザッパはその二人をかばう。

普通に家に飾られていたならば可愛らしい面立ちなのであっただろうそれは、今や人をすくみあがらせる悪鬼のような表情の呪いの人形に見えた。

人形が身構えたムーザッパの腕をかすめる。革鎧の下に身につけていた布の服が裂けた。

「ムーザッパ! 大丈夫!?!」

その時既に人形は次の攻撃に備えていた。ムーザッパはショートソードを抜いて人形に対峙するとルタミナに向かって怒鳴った。

「ルタミナ！ 人形は俺がくい止める。おまえはその子をゴスパーさんのところへ！」

——駄目！ パパの娘は私だけよ！

また頭に直接響く声。そして人形はリリアに向かって再び飛びかかる。

「ムーザッパ！」

ルタミナの叫びに呼応するように、ムーザッパはダッシュして人形をなぎ払った。

この時ばかりはムーザッパはお姫様にメロメロになっている情けない男ではない。力強く頼もしい戦士となる。ムーザッパはルタミナに目で合図する。うなずいてルタミナはリリアをだっこし、洞窟の入り口へ向かった。

——どうして、どうして邪魔をするの！

人形は攻撃対象をムーザッパに切り替え飛びかかる。そのスピードも脅威であったが、それよりもむしろ彼を悩ませたのは、人形の思念から生まれ、頭に響いてくる『声』。いまやそれは映像を同伴っていた。

——あの子さえ帰ってこなければ、私がずっとパパの娘でいられた。

屋敷の中で、本物の娘のように人形を可愛がるゴスパーの姿の幻影。

——あの子のせいで私は愛を失った。

ゴスパーの視線は本物の娘のほうへ向かい、人形は忘れ去られる。そして海へ捨てられる。

——だから私はあの子になる。

そして、ムーザッパにはよくわからない魔法円や媒介となる道具の幻影が映る。

「人形が……、人形が人として過ごしているうちに人の心を持ってしまったのか……」

そして何らかの形で魔法が関わり、このような事件が起こってしまった。

冷静に分析することで感情を消す。戦況は次第にムーザッパに有利となっていた。

高速で飛び回る人形を捉えるのはなかなか困難な事ではあったが、その動きは単調だった。怪奇な現象もそういうものだと思えば、後はただ戦いの相手として見据えるのみ。彼はやがて人形の動きを完全に読みきった。

「そこだ！」

ムーザッパの剣は人形の胴体に見事にヒットし、人形は真っ二つにされた。人形はそのまま落下した。

——パパ、パパ……！

人形が泣いていた。……ように見えたがそれはただ海水に濡れて

いただけだった。

ムーザッパが洞窟の壁にもたれて休んでいると、しばらくしてルタミナが戻ってきた。

「ムーザッパ！ 無事だった！？」

「おう、あの娘は？」

「大丈夫！ ちゃんとゴスパーさんの屋敷に送り届けたよ！ ……
つて、ちよつと、それ！」

ルタミナは彼の傍に横たわるものを見て思わず叫んだ。二つに斬られた人形が、元に近い形にして並べられて置かれていた。

「この子も連れて行って欲しいんだ。この子も、同じようにゴスパーさんの娘なんだから」

「……」

「ゴスパーさん、本当にあの人形を愛していたんだろうな。だからあの人形も本当にゴスパーさんのこと、父親として慕っていたんだろう。人の心を持って動き出してしまふほどに……。ゴスパーさんもあの人形の墓を作るって約束したし、人形も報われるよ」

屋敷へ戻って事情を話し、契約された礼金をもらって帰る道の途中でムーザッパはルタミナに話しかける。

ムーザッパはしみりしているようだが、ルタミナはむしろ嫌悪を感じていて黙っていた。

すべてはあの人の娘への妄執が産んだ事件じゃない。あの人形が

動き出してあんな行動をとったのは父親の歪んだ愛で生み出された魂だったからでしょ。

気持ち悪い。それが彼女の正直な気持ちだったが、ムーザツパの気分を悪くするまでも無いと思い、口には出さず、いいかげんな相づちを打っただけだった。

消えた幼な子（後編）（後書き）

8話を書いていたら、ちよつと長くなってしまつて二つに分けるので全13話に変更します。

動き出す陰謀

エレンは最上の笑顔をムーザッパに向けて言った。

「好きよ、ムーザッパ。この世の誰よりも。大好き」

小さな花が咲き乱れる丘の上。そこにいるのはエレンとムーザッパの二人きり。

「姫様……」

「ううん。二人きりの時はエレンって呼んで」

「エレン……」

ムーザッパはエレンの頬にそっと手を触れる。エレンは静かに目を閉じる……。そんな彼女を抱き寄せ、ムーザッパはその唇に自分の唇を近づけた。

ムーザッパは目を開けると、枕から唇を離れた。ベッドの上。体がゆらゆらと揺れている。

ああ、そうか。俺、船に乗ってたんだっけ。

ムーザッパは記憶を取り戻した。

やっぱり夢か、と、ムーザッパは落胆しつつ夢の中でエレンであった物体を抱きしめる。

彼は彼女に心を奪われて以来、よく彼女の夢を見る。夢の中では彼女はいつも彼に微笑みかけてくれる。好意を示す言葉をかけてくれる。そして目覚めたときには彼女への思いが痛いくらいに強まっていく。

一瞬彼は泣きそうになるが、気を取りなおして起き上がり、顔を叩くと旅の同行者を探して客室を出た。

いつか夢が正夢になることを祈っている。

「何だ、ここにいたのか、ルタミナ」

彼女は甲板で海を見ていた。風が彼女の短い茶色の髪をさわさわと揺らしていた。

「あ、ムーザッパ、私を探してた？」

ルタミナは振り返り、彼に微笑んだ。

「いや、別に用はなかったけどな。……ルタミナ、やっぱりドキドキするか？」

「まあね。お兄ちゃんと顔をあわせるのは、本当に久しぶりだからね」

「俺も楽しみだよ。ルタオンに会えるのは」

ルタミナとムーザッパは、定期連絡船に乗ってアウグル島へと向かっていった。

先日の少女失踪事件からまもなくの事。ウエアリン王国城下町はひとりの男の来訪でちょっとした騒ぎになった。その男の名はヤウロ。癒しの力と聖なる力をあやつり、聖者と呼ばれていた。彼は世界中を旅して病氣や呪いにかかった人達を癒していた。

しかしその能力ゆえ魔大戦の折には魔王に目をつけられて呪いを受け、二人の勇者が魔王を倒すまで体を石にかえられてしまっていたのだ。

彼が城下町に現われると彼の癒しの力を授かりたいと思う者、ただ見たいと思う者で通りがあふれかえった。

ルタミナとムーザッパも興味本位で彼の姿を見に行ったのだが、ここで思いがけない事態に出会った。

ルタミナの姿を目の端にとらえたヤウロが、彼女に向かって、ルタオン、と呼びかけたのだ。驚いたルタミナはヤウロから詳しい話を聞くことにした。

ルタミナとルタオンは5つ年の離れた兄妹であるが、並んで歩いていると、誰でもすぐに二人がそうだと判るぐらい容姿が似通っていた。ヤウロが間違えても無理は無い。

ヤウロは、以前アウグル島のメサチの町に立ち寄ったとき、祭りの舞台で豎琴を弾いていた男に出会った。彼の演奏に感銘を受けたヤウロは彼に接触し友人となった。その男はルタオンと言う名で、ルタミナとよく似ていたそうだ。

ルタミナが自分はルタオンの妹であり、行方不明になっている兄を心配していたのだと聞くと、彼はうなずき、メサチの町までの交通手段を教え、ルタミナに貝殻でつくったお守りをプレゼントしてくれた。

そしてルタミナはムーザッパと共に、ガルガニスに休暇を申し出てアウグル島へ行く許可をもらった。

「普段から男の格好をしているのが役に立ったな。ルタミナ」

ムーザッパはからかい口調で言う。彼は普通こういうことは言わないのだが、相手が幼なじみのルタミナならば話は別だ。

「何、イヤミ？」

「ハハハッ。まあ、でも、今日の服はまるで女の子みたいじゃないか」

ルタミナはムーザッパに憎たらしい顔をしてみせると、そっぽを向いた。

今回の旅ではルタミナは珍しくスカートを穿いていた。さらには飾りヘアピン、手首にはヤウロからもらったアクセサリーにもなっているお守りをつけており、これで誰が見ても彼女を女の子だと思うだろう。

ガルガニスの勧めもあって、仕事以外で遠出をするのだからと多少のおしゃれをしてきたのだ。

ムーザッパの役目はルタミナの護衛である。しかしもちろんムーザッパもまたルタオンとは浅からぬ縁があり、彼自身も再会を心待ちにしていた。

今から15年前、ルタミナの家の前に籠に入れられた赤ん坊が置かれていた。それを当時5歳のルタオンが見つけた。それが出会いだった。

ルタミナの両親と友人であったガルガニスは、二人も手のかかる子供がいる家庭では養育も大変だろうと、その赤ん坊を引き取り、ムーザッパと名づけた。

幼い頃はムーザッパは捨て子という理由で近所の子供達にいじめられることもあった。しかしルタオンは彼をかばい、ルタミナとともによく遊んでくれた。

人当たりがよく快活なルタオンは町の人気者で、やがて彼のとりなしで、ムーザッパと他の子供達との和解も成立する。そのことについてはムーザッパは今でも感謝の気持ちを忘れない。もちろん、ルタミナに対しても同様の気持ちを抱いている。彼はルタミナの後ろ姿を見ながら、心の中で小さく感謝の意をつぶやいた。

やがて船はアウグル島についた。

メサチの町はアミザール帝国人の末裔の町と言われている。

はるかな昔、高度な魔法文明を築いたといわれるアミザール帝国は、一夜にして滅亡した。

滅亡したという表現は不適切かもしれない。文献にはアミザールの民は一夜にして死人となった、とだけ記されている。学者達の間

ではそれは伝染病だったのではないかという説がある。だが、不老不死となり、神に匹敵する力を得られるという霊薬エリクサーを發明したアミザール文明にしては不可解な事であった。

メサチの町は帝国領の中では最も新しい区域であり、当時は帝国の文化がまだ浸透していなかった。そのために滅亡を免れたのだともいう。町のはずれにはアミザールの遺跡がわずかだが残されていた。

ルタミナとムーザッパは、ルタオンを探しに町の中心部を通りぬけ、居酒屋通りへ向かった。音楽家は酒場での演奏というのが食いつ持をかせぐ最もポピュラーな方法だからである。

「それじゃ、まずは、この通りの酒場をひとつひとつ当たってみましょうか」

「うん……結構、あるな」

「いきなり弱音を吐かないで」

「それに、必ずしも酒場にいるとは限らないしさ……ん？」

ルタミナは手をあげてムーザッパを制した。

「何だ？」

「ねえ、ムーザッパ、何か聞こえない？」

「何かって？」

ムーザッパは耳を澄ます。人々のざわめき、足音、台車を引く音……。

「ほら、この曲」

ルタミナに言われて、ムーザッパも何か音楽が流れているのが判った。優しい豎琴の音色だ。

「このメロディー、覚えてる…覚えてる！ムーザッパ、こっち！」

ルタミナは駆け出し、その後をムーザッパが追う。ルタミナは既に涙ぐんでいた。

「ここだ」

ルタミナは＜竜踊亭＞と看板に書かれた酒場の扉を開けた。

「お兄ちゃん！」

彼女は呼びかけてから、兄の姿を目で探した。竜踊亭の客たちが怪訝そうにルタミナを見る。構わずルタミナはもう一度、お兄ちゃん、と呼びかけた。

自分を見つめる視線があった。その一つにルタミナは目を合わせた。その視線の主は小さく声を漏らした。

「ルタミナ……」

果たしてそれは彼女の兄、ルタオンであった。

「あ……」

ルタミナはぽろりと涙をこぼした。奏でていた豎琴をおろし、立ちあがるルタオン。ルタミナは兄に向かって駆け寄り、そしてそのまま勢いを止めることもなく体当たりした。

「ぐふえっ」

「うわーん、お兄ちゃんのバカー！！ 無事だったんならどうして

うちに帰ってきてくれなかったのよー!」

「ぐう、ルタミナ、どうしてここに? あ、ムーザッパも」

「答えて、お兄ちゃん、魔大戦でお父さんもお母さんも死んじゃったんだよ。私は家にひとりぼっちなんだよ。帰って来てよ! こんなに心配させてえー!」

ルタミナは兄をキツ、と睨む。

「え、えーとねえ」

ルタオンは口籠もり、双方黙り込んでしまった。竜踊亭の客たちは呆気にとられ、自分達のおしゃべりを止めてそれに見入ってしまった。酒場は奇妙な沈黙がおとずれたが、ルタオンの背後に現われた女性がそれを破ろうとしていた。その女性は軽くルタオンの袖を引っ張った。

「?」

怪訝そうに振り返ったルタオンの目が、彼女を見て穏やかなものになる。彼女とルタオンは親しい間柄のようだ。黒く長い髪に黒い瞳の美しい女性だった。

「あ、クララ……、どうしたんだ?」

「あなた。大変なの。ポールの熱がまた上がったの」
「なにっ?」

ルタオンは顔をしかめると、妹の方に向き直った。

「……ルタミナ、悪い。ちょっと待っててくれ、すぐ戻るから」

そう言うところ、ルタオンはクララという女性と共に酒場の階段を上って行った。

「『あなた』？」

ルタミナは眉間に皺を寄せた。

「お兄ちゃん、どういうこと？ 誰？ あの女の人……」

しばらくすると、ルタオンが2階から戻って来る。ムーザッパとルタミナはテーブルの一つについて食事を注文していた。酒場の中は普段どおりの喧騒を取り戻している。

「んー、ドコから話せばいいかなあ」

「お兄ちゃん！」

ルタミナは軽く拳でテーブルをこつんと叩く。

「ルタミナ……、何をそんなにカリカリしてんだよ……」

ムーザッパはつぶやくが無視される。

「あの人の旦那さんは魔大戦で命を失って、母子ふたり、生活に困っていたんだ。それで俺がちょっとした縁で知り合ってさ、一緒に生活してるんだ」

「ちょっとした縁って……。お兄ちゃん……」

ルタミナの表情が曇る。困っている人を見かけると助けようとするのはルタオンの性格であることは彼女は重々承知している。けれども、一緒に暮らしているというのは、ルタオンがそのクララとい

う女性にただの同情ではない、特別な感情をもっているという事だ。

「いや、でもあの人はホントに困ってたんだ。それに……」

「だからって、ずっと家に帰ってこないなんてヒドいじゃない」

ルタミナは唇を噛んだ。兄が家族のところに戻るよりもその女性と共にいることを選んだことに不快感を隠せない。

「いや、それは……」

「それは？」

「あ、いや……ところでルタミナ、俺が留守の間に誰か見慣れない奴が俺を訪ねてこなかったか？」

「え？ ううん？ 別に？ 何それ？」

「そうか……よし、判った。そうだな、一度は帰らなきゃな。決めた。帰ろう。ただ、ちょっとだけ待ってくれ。ちょっとポールくん……あの人の子供だけど……その子、今、手が離せない状態なんだ」「そう言えば何だか具合が悪いみたいなこと言ってたね。病氣なの？ その子が回復するのを待ってってこと？」

「いや、実は、あの子、炎死病なんだ」

「炎死病!？」

ルタミナとムーザッパ、二人は同時に驚きの声を上げた。

炎死病というのはとある魔物に噛まれたときに感染する病氣である。一度かかると体じゅうに赤い斑点が現われて高熱に侵され、最後には死んでしまう。魔大戦時、上位魔族がばらまいた恐るべき生物兵器だった。

「ルタオン、あの病氣にはどんな薬や魔法も効かないんじゃないかかったのか？」

「ああ、だけど俺はたとえば炎死病であっても絶対効くはずの薬を知

っている。それがどこにあるのかも知っている」

「だったら、それをすぐに使えばいいじゃない」

「ああ。だけどころいろいろ事情があつてな。……家に帰ったら全部話すよ。早速行こう。薬を取りに」

「どこに行くの？」

「アミザール遺跡だ」

アミザール遺跡は町の外れの囲いの外にあった。そこは以前は宝物目当てで多くの冒険者が来ていたが、今ではそれも取りつくされ、観光地としての価値以外は特にない。メサチの町の人々もあまり関心がないような場所になっている。

ルタオンはそんな話をしながらとある石柱の前までやってきた。

「ルタミナ、ムーザッパ、周りに人がいないか確かめてくれ」

確認をするとルタオンは石柱に手を添え、ガサゴソと動かした。

ガタツと音がして、石柱を構成する石がスライドし、空洞が現われた。そこには細長い箱が入っていた。

「この中に薬が入っているの？」

「いや、そうじゃない。この箱の中に……」

そう言つてルタオンは上着の内ポケットから小さな乙女像を取り出した。それを箱の中に入れると、ルタオンは箱を元の位置に戻した。すると今度は石柱のそばの床石がずれて、小さな空間をさらした。ルタミナはそこを覗き込んだ。

「随分嚴重ね……って、何もないよ？」

「そこが二重底になっているんだ。ほら」

ルタオンは一つ目の底を取り外した。

「ルタミナ、ムーザッパ。お前たちだけでは教えておこう。これが伝説に名高い、アミザール文明の奇跡の薬エリクサーだ」

「えっ、これが……」

小さな瓶に入った黄金色の液体が日の光を浴びてきらきらと輝いていた。

「どうして俺がこんなものを持っているのか、説明は後でゆっくりしてやる。とにかくこのエリクサーはホンモノだ。ポールに飲ませれば一発で治るはずだ」

普段の傭兵稼業では滅多にお目にかかることのない、いわゆる伝説のアイテムを目の当たりにし、ルタミナとムーザッパはそれに思わず見入ってしまった。その輝きはエリクサーの品質を保証しているかのようだった。

「そう、そんなところにあったのね」

あらぬ処から声が発せられる。

「えっ!?!」

振り向くとそこにクララが立っていた。

「クララ……。何でここに? ついてきてたのか?」

「随分待ったわ。1年くらいかしら?」

「『待った』? 何だって? クララ、1年って、それはどういうことだ?」

「あなたの信頼を得るために、何もしないであなたと1年間過ごしたことは決して無駄にはならなかったみたいね」

クララは目にも止まらぬ素早さでルタオンの手からエリクサーの入った小瓶を奪い取った。それは訓練された人間でないと

「あっ」

「ふふっ、これがあのエリクサーね。綺麗……。さて、これを手に入れたからには、後はこれを届けるだけね」

「クララ、君はまさか…」

彼女は笑顔でこくんとうなずいた。

「楽しかったわよ。あなたとの日々は」

クララは何かの言葉を早口で唱えた。一瞬彼女の周りの景色がぐにやりと歪み、そして彼女の姿は消え去った。空間転移の魔法だ。

三人は風のように突然起こって終わった出来事に、呆然とするあまり、石柱をするするとすべりおちてくる小さな影に気がつかなかった。

ルタオンが背中に鋭い痛みを感じて振り返ると小さな黒髪の子供……ポールが短剣で自分を突き刺しているのが判った。

「ポール……！ おまえもっ!？」

「僕の役目はエリクサーを回収したら速やかにルタオンを殺すことなんだ」

ポールの体にあったはずの赤い斑点はもうない。

「僕もつらかったよ。エリクサーを手に入れるためとはいえ、炎死

病にかかった演技を続けるのは」

「……っ！」

ルタオンは信じられない出来事で我を失い、ポールがさらに自分の心臓を目掛けて短剣を再び突き刺すのをかわせなかった。

「お兄ちゃん！」

ルタミナの叫びで、やっと呪縛が解けたようにルタミナとムーザッパは、ポールに飛び掛かる。しかし、ポールも早口で空間転移の呪文を唱え、寸前で姿を消してしまう。ふたりは攻撃が空振りに終わってバランスを崩し転んでしまった。

ルタオンはその場に膝をつき、それでも耐えられなくて腰を落とした。ルタミナはあわててルタオンを抱きかかえる。

「くっ、まさかこんなことになるなんて……。ルタミナ……済まない。俺、帰れそうにないわ」

「お兄ちゃん！ 何言ってるの！」

「あの二人が奴らの手先だったなんて……。迂闊だった……」

「あんまり喋らないで、お兄ちゃん。傷が……！！ ムーザッパ、薬草、早く！ 血止めの薬草を出して！」

「いい……。無駄だ……。もう、遅い……」

「お兄ちゃん！ 黙って、手当てを受けて！」

「いや、ルタミナ、ムーザッパも。聞いてくれ。伝えておかなければいけないことがある。エリクサーは奴らの手に奪われてしまった。大変なことになる……」

「奴ら！？ 大変なこと！？ きゃっ」

ルタオンがごぼっ、と血を吐いた。血は彼から彼の体を支えていたルタミナの体に伝わって流れ、彼女の手と腕を汚す。

「ああ、エリクサーはただの万能薬じゃない。飲んだ人間にすさまじいパワーを与える効果があるんだ。奴らがエリクサーの分析に成功して大量に生産してしまったら、世界はまた戦争に……」

「奴ら？ 奴らって？」

「ルタミナ、ムーザッパ、頼みがある。サクラという変わった名前の魔法使いがドラゴンと一緒にどこかに住んでいる。彼女達を見つけて出して、エリクサーを奪われてしまったことを伝えてくれ」

「どこかって!？」

「頼む、頼む……」

するとルタオンは何事かよくわからない言葉をつぶやき、手足をばたつかせた。

そして、動かなくなった。

ルタミナの腕の中でルタオンの力が抜け、重みがかかる。

「お兄ちゃん？ お兄ちゃん!？ ねえ、お兄ちゃん!!」

ルタミナは何度も何度も兄の名を呼び続けた。

……。

「何だ、ここにいたのか、ルタミナ」

彼女は甲板で夜の海を見ていた。風が彼女の髪をさわさわと揺らしていた。夜空には星が美しく輝いていたが二人とも見ていなかった。

「あ、ムーザッパ、私を探してたの？」

ルタミナは振り返り、彼に弱弱しく微笑んだ。

「ルタミナ、俺、こういうとき、何て言ったらいいのか……。せっかく再会できたのに、その途端に……」

「ねえ、ムーザッパ、私のせいかな？」

「え？」

「私さ……。ムーザッパは気づいてたかな？ 嫉妬してたのよ。あの人に。それぐらいお兄ちゃんの本気であの人達のこと想っていたみたい。なのにあんな裏切りを受けて……。お兄ちゃんの気持ち考えると私も胸が……。張り裂けそうになる。あそこに私が押しかけて行ってお兄ちゃんを急かしたりしなきゃ、お兄ちゃんはエリクサーを使おうとは思わなかった。そしたらあんなことにはならなかったんだと思う。それに」

「ルタミナ、自分を責める考えはよせ。事情はよくわからないが、あいつらはルタミナに関係無く、ルタオンからエリクサーを奪おうとあの手この手を使ったはずだ。ルタミナに責任はない」

「……そう言われても、私がどうしても、お兄ちゃんは、お兄ちゃん
は帰ってこない」

ルタミナは振り返りある方向を見つめた。その方向はルタオンの入った棺のある船室があるはずだ。

「ルタミナ」

ムーザッパはルタミナの肩をつかんだ。

「俺達にはやるべきことがある。ルタオンが残してくれた言葉に従ってサクラという名の魔法使いを探さなきゃ行けない。それがルタオンの意志だ」

「……うん、ありがと、ムーザッパ。珍しいね、あんたのほうから

何かしようって言い出すなんて」

「そうか？」

「でも、いいの？もうすぐエレン様の誕生パーティーなんでしょ？ムーザッパ、お休み取りたいんじゃないの？」

「馬鹿にすんなよ。いくらなんでも俺だって、やるべきときにやらないといけないことがあるってことは判ってる」

ルタミナは微笑む。そう、私にはやるべきことがある。泣いてばかりいられない。

「風が……強くなってきたな」

「戻ろうか、ムーザッパ」

「ああ」

この時二人はこの風が嵐の前触れであるということは知る由もなかった。

不自然なまでに急速に嵐雲が現れ、天空の星々を覆い隠していった。それはまるで、天がルタミナの心を写し出して代わりに泣き叫ぼうとしているかのようにだった。

サイレン（前書き）

最初に書いておくのを忘れましたが、展開がアホみたいに速いです

サイレン

奇妙なことに、ベテランの船乗り達もその大嵐を予想することができなかった。航行前の天気は全くの正常だったはずである。急激な風雨に船員は動揺してしまい、ムーザッパとルタミナの乗りこんだ帰りの定期連絡船はかじを失って岩礁に衝突してしまった。今やその衝撃であいた穴から大量の海水を飲みこんでいく船は沈没への一途をたどるしかない。彼らは客達に状況を告げ、緊急用のボートへ乗り移るよう指示する。

しかし、ルタミナは船員の指示する方向とは逆に、貨物置き場へと向かった。

「ルタミナ、どこへ行く！ こっちだ！」

「だって、お兄ちゃんが！」

「ルタオンのことはあきらめろっ。ボートに乗れなくなるぞ！」

「ヤダ！ お兄ちゃんを置いて行くくらいなら、死んだ方がましよ！」

「馬鹿っ！ 後を追うつもりか！」

「でも、イヤッ！」

ルタミナは貨物置場に向かってよろよろと走り出した。暴風雨に揺られる船底は足場が悪く、うまく走れない。着なれないスカートに履きなれないお嬢さん靴がさらにルタミナを妨害していた。

「ルタミナっ！」

ムーザッパは、彼女を引き止めるべく走り出した。

「お兄ちゃん……」

ようやくたどり着いたルタミナは普通の荷物のように装われた兄の棺を見てほっとひと息ついた。その1秒後にムーザッパが追いつく。

「ルタミナ……！」

彼女は振り返ると、これ以上ないくらい必死な、そして泣きそうな顔をしてムーザッパに請願した。

「ムーザッパ、お願い……一生のお願い……。手伝って」

胸がカーッと熱くなる。

「分かった。二人で運び出そう」

二人はルタオンを抱え、大急ぎで雷雨降りしきる甲板に戻る。しかし、既にすべての緊急用ボートは出て行ってしまった。

「あ……ここまで、か」

「……ごめん、ムーザッパ」

いつになく落ち込んだセリフを吐くルタミナにムーザッパの勇気が励起された。

「あきらめるのはまだ早いか。ここには水に浮くものがたくさんある。これをうまく利用すれば何とかなるかも知れない」

「何とかって……」

「とにかく窮鼠猫を噛む、だ。最後の最後まで諦めず、筏代わりになるものを作ろう」

雨で手が滑る中、それでも何とか二人は、三人の人間をのせられるだけのものを作り上げた。

「よし、自信はないが、これに乗って行こう」

カッと雷光が輝いた。それは船のマストに直撃し、船を大きく傾かせる。

「ああっ！」

ムーザッパも、ルタミナも、ルタオンの棺も、筏も、重力に引かれ海へ滑り落ちていった。

苦労のすえ作り上げた筏は海に投げ出され、あっさりとバラバラに崩れてしまった。これでは乗らない方がよかったかもしれない。そう言う意味では幸運だった。だが、事態は全くよくなったわけではない。船もどんどん沈んでゆく。

今度こそ、おしまいかな。

ムーザッパは心の中でつぶやいた。船の破片や小さい樽は気休め程度に自分を浮かせるだけだ。泳ぎには自信があるが、この嵐の中を陸地まで泳ぎ着くのは不可能であろう。傭兵稼業を繰り返してきた彼も幾度かは生命の危機に陥ったこともある。しかしそれでもギリギリのところまで生き残ってきたのだ。その運で、何とかなるだろうか。今度ばかりはどうにもならないかもしれない。

エレン様…。

死を覚悟したムーザッパは、世界で一番好意を寄せている女性の

ことを頭に浮かべた。

ふわっと体の力が抜けた。頭が真っ白になった。

ムーザッパは立ち泳ぎを止めた。

「ねえ、ムーザッパ」

エレンは彼にすりよると、甘えた声でムーザッパに話し掛けた。

「何？」

ムーザッパは優しい目つきをしてエレンに向き直り、彼女の髪を撫でた。

二人きりの砂浜。ムーザッパとエレンはべったりとくつつきながら、しばらくの間無言で一緒に海を見ていた。

「ねえ、今、何を考えていたの？」

「んー、エレンと同じこと」

「やだ……もう」

そう言いながらもエレンはムーザッパの後頭部に手をまわして彼にキスをする。無論ムーザッパはそれに応え、自分からも彼女の唇を吸った。

いつになく濃厚なキスに酔いしれたエレンは、あふ…、と色気のあるため息を洩らした。その表情に欲情したムーザッパは不意打ちのように彼女をきつく抱きしめた。

「あん…苦しいよ、ムーザッパ…」

エレンは抗議するが、ムーザッパは抱擁の手の力を抜かない。エ

レンはお返しにとばかり自分も彼を強く抱きしめた。そして……。

「ムーザッパ、ムーザッパ！」

ムーザッパは目を開ける。

「あ……あれ？ 何でルタミナがここにいるんだ？」

横になっているムーザッパの姿をルタミナが覗き込んでいる。自分分はベッドの上にいるらしい。

「大丈夫？ 苦しくない？」

「ルタミナ？ はっ、そうか、俺……」

たちまち嵐の出来事が頭の中に蘇る。

「俺、俺たち、助かったのか？ここは……どこだ？船室？」

確かにここは船室のようだった。簡素ではあるが、高価な材質を使った調度品がいくつか置かれている。海図と磁石が置かれているのがここが船室であることを示していた。部屋の中は掃除が行き届いているようにきれいだ。

「これは……？」

「びっくりしたでしょ。私もはじめ、夢か幻かと思ったわ。でも、そうじゃなかった」

「ルタミナ、俺どうして助かったんだ？」

「覚えてないの？折角の私の苦勞を……」

ルタミナはがっかりしながらいきさつを説明した。

嵐で海に投げ出されたルタミナは夢中でルタオンの棺にすがろうとしたが、みるみるうちにその距離が引き離され、ルタミナの体力も尽きかけた。悔し涙を海水に流されながら小さくなっていく兄の棺を見守っていると、いつのまにか自分の耳に美しい音楽が聞こえてきた。幻聴かとも思いながらそちらを見た彼女は目を見開いた。一隻の小型船がこちらに近づいてきていたのである。連絡船のボートかとも思ったが、それとも違うようだった。しかしその際、どちらでもよかった。助かる道を見つけたルタミナは、最後の力を振り絞って船まで泳ぎついた。そして、溺れかけているムーザッパを見つけて、火事場の馬鹿力で彼を引き上げたのである。

「あの時はもう、夢中だったわ。ほんと、あんたの体の重さをすっかり忘れてた。あんた、だいぶ水飲んでたから必死で人工呼吸したんだから」

「そうだったのか……。すまない、ありがとう。ルタミナ」
「……」

言葉以外のリアクションが欲しかったルタミナは拗ねた目で彼を見つめた。しかしムーザッパは気づかなかった。

「ところでムーザッパ、体の方はもう大丈夫？ 動けるなら、外に出てみる？」

「ああ、そうだな。この船の人にもお礼言わなきゃいけないし」

「いないわよ」

「えっ？」

「いないの。この船にはだあれも」

「そんな馬鹿な。この船が漂流船？ こんなにきれいなのに」

言いながらムーザッパは体を起こし、船室のドアを開ける。どつと強い風とまぶしい太陽の光が飛び込んできた。嵐は嘘のように収まっていた。

ムーザッパは船室を出てすぐにルタミナの言葉が真実であることがわかった。船は小さく、船室は自分がさっきまで寝ていた場所しかなかったのだ。

不思議なことにこの船には帆もなく、もちろん漕ぎ手もないのにそこそこのスピードで動いていた。

甲板を歩くうちにムーザッパは既視感に襲われた。

あれ……？ 俺、この船、見たことあるぞ。何でだ？

「ムーザッパ！ ね、言った通りでしょ」

「うん……。なあ、ルタミナ。この船どこかで見たことないか？」

「え？」

「いや、俺、絶対知ってるよ。この船。見たことあるって」

ムーザッパは目をつぶって記憶をたどる。そして突然大声を上げた。

「判った！ これ、勇者の船だ！」

「えっ！？」

「ほら、姫様が魔王を倒して城に凱旋されるときに乗ってきた船だよ。たしか『フェアリア』という名前の！」

「ええっ！？ でも、その船は町の運河に奉られているんじゃない？」

「いや、間違い無い。俺はエレン様に関連する事柄では記憶違いをしたことがない」

「その通りです」

突然第三者の声が聞こえ、二人はビクリと身体をすくめてそちらを見た。

船首の方向にもやもと煙のようなものが浮かび上がると、やがてそれは半裸の女性の姿をとった。それが普通の人間ではないことは彼女の体が半分透けていることから瞭然であった。

「これはまさしく勇者様の船。私はこの船の魂、フェリアです。海神様の怒りは私が強めました。もう、お守りを血でぬらしたりしないで下さいね」

「船の、魂？」

「ええ」

フェリアとはもともと海神の側に仕える海の魔物、サイレンであった。その姿かたちは人間の女性に酷似している。ときどき人間に近づいてその美声で惑わせ海に引きずり込むのを楽しみにしている種族だった。

海神とは、神の名がついてはいるが真の神ではなく、時化しけを起こす力を持った魔物である。魔大戦の際には魔王の下についていた。フェリアの住む海域では、サイレンは彼女と彼女の姉のフィーネだけであった。二人はどれだけいい男を引きずり込むかを競っていた。

その力を魔王に見込まれた二人は海神を介して、人間達の船を襲うよう命じられた。無差別に大量にその能力を発揮させられた二人は次第に疲労し、魔王に反感を持つようになっていたが、魔族の力を恐れ仕方なく役目を続けた。

そんな時、彼女達の能力がぱったりときかなくなってしまった。不審に思ったフェリア達が調べると、航海する船には一人の吟遊詩人が乗りこんでいた。その名はルタオン。彼はサイレンの歌声よりも美しい音色の音楽を奏で、船上の人々を幻惑から防御していたのである。

彼女達はルタオンを殺すよう命じられた。フェリアとフィーネは人間に変身して港町の宿屋の彼の泊まっている部屋へ潜入し、寝込みを襲う計画を立てた。しかしフェリアは、フィーネが短剣を振り下ろした瞬間、とっさに彼をかばってしまった。それは彼女の中で、ルタオンの音楽センスに嫉妬する気持ち以上に、彼の音楽と彼自身を愛する気持ちが大きくなってしまったからだだった。彼女の命は失われたが、その魂はルタオンの豎琴に乗り移った。その状態で彼女はルタオンに愛を告白した。

その後、ルタオンは成り行きで魔王対策プロジェクトに参加することになる。その一環として勇者達が魔王城に向かうために、特別な船が設計されることになった。技師ミューラスの発明した風や人の力を借りない船であったが、それだけでは荒れ狂う海に立ち向かうことができない。そこでフェリアはルタオンに申し出た。自分がこの船に魂を乗り移らせれば、海神の力のある程度おさえられる、と。

ルタオンはフェリアに感謝の意を表し、その船に彼女の名前をつけたのだった。

役目の終わった今、フェリアは城下町でルタオンの帰りを待っていたのだという。

「それで、どうしてわざわざ私達を助けに来てくれたの？」

「ルタオン様に呼ばれたんです……」

そう言うフェリアは海の魔物とは思えぬような愛らしい表情をした。

「お兄ちゃんに？」

「私、聞こえたんです。ルタオン様の声が。嵐にあって危険にさらされている。助けに来て欲しいって。そこであなた方を見つけたのです」

「お兄ちゃんが…」

「あなたはルタオン様の血縁の方ですね？　よく似ておられます」

「ええ、私はルタミナと申します。ルタオンの妹です。でも、兄は……」

「判っています。こちらの世界の人ではなくなったのですね」

「……」

「構いませんよ。あなた達はこのままウェアリン国城下町まで連れて戻ります」

「ありがとうございます」

ルタミナは優しく笑った。

ムーザッパは何か考え事をしているようだったが不意に、はつ、と声をあげた。

「どうしたの、ムーザッパ」

「い、いや、何でも無い。それより、俺、まだ少し気分が悪いからベッドに戻るよ」

「そう？　私はもうしばらく風にあたってるわ」

ムーザッパはフェリアに礼を言うのと船室に向かった。

ルタミナは風に当たると同時にもう少しフェリアとルタオンの話題をしたくて、その場に留まっていた。せっかくおしゃれでつけてきた飾りヘアピンはどこかへいってしまい、髪の毛も塩水を浴びてそれが乾いただけなので無残な姿へとなっていた。

「それにしても、お兄ちゃんが、そんな凄いことに参加していたなんて驚き。お兄ちゃんがエレン様達と一緒に魔王を倒す計画に……。それじゃあ、声、掛け合ったりしたこともあったのかな。ムーザッパ、うらやましがるだろうな。ねえ、フェリアさん。どうしてお兄ちゃんはそんなことに参加することになったの？」

「ええ、きっかけは、キース様が魔法の薬草を買い出しに行った帰り、ごろつきにからまれていたのを助けに入ったことでした。あ、キース様というのは、魔女サクラ様のお弟子さんで……」

「えっ？」

「ああ、サクラ様というのは計画のリーダーにあたる方で……」

「サクラ？　ちよっと、詳しく聞かせて、フェアリアさん、その人のこと」

ルタミナはフェアリアに詰め寄ってその名前の人物について聞けるだけのことを聞き出した。そして興奮のまま船室に駆け込む。サクラの手がかりを早くも見つけたのだ。ムーザッパにも教えなければ。だが、室内のムーザッパの様子を見て、ルタミナは声を失った。

彼は船室内の勇者用のベッドの上に顔をうずめ、もだえていた。

「ああゝ、エレン様ゝ」

こ、こいつはあ！

ルタミナはあまりにあまりな彼の行動に身体が震え、少し暴力的な気分になった。

勇者の力

二人はフェリアに進路を変更してもらい、ジェムの町に到着した。ここは、魔女サクラの弟子、キースが薬草を買いに来た町である。

魔法の草は種類によって、生息する地域が限定されている。現在も利用している可能性は高い。また、この町には魔法使いや錬金術師が迷路のようなスラム街に数多く在住している。魔道の町なのだ。

フェリアの言っていた魔法道具店へおもむくと、キースという少年が今でも時々訪れていることが判った。当たりだ。

二人はその店主に無理を言ってアルバイトとして雇ってもらい、キースを待った。

そして3日目、少年の客が訪れた。自分の顔を見てわずかに驚いた彼を見て、ルタミナは確信した。この子だ。店の外で彼に事情を説明すると、キースは納得し、魔女サクラの家まで案内すると申し出た。

「うむ。ルタオンが……。そうか……」

サクラは渋い顔でルタミナの説明を聞いていた。魔女サクラの家は予想通りジェムの町のスラム街にあったがそこまでの道のりは複雑に込み入っていて、キースに案内してもらわなければとてもたどり着けなかっただろう。

「サクラさん。兄はいったい何に巻き込まれたというのですか？
教えてください」

「そう……じゃな。奴らがエリクサーを手に入れたしまった、この非常事態じゃ。お前達にも協力してもらおうかの」

「あの……奴らって、いったい何者なんですか？」

「ああ、言ってなかったか。それはタイラン王と王国軍のことじゃ」

魔大戦の際、最も功績をあげたのは世界最強の軍事国家であるタイラン王国である。タイラン王は国家の矜持にかけて魔物たちを滅ぼさんとしていた。

長引く戦闘に不利を感じたタイラン王は、魔王の暗殺を命じ、そのための計画が練られた。宮廷魔術師の一人、サクラの案は、四大元素の精霊の力を人間に注入して魔王に対抗できるパワーをもつ「精霊戦士」をつくるというものだった。

だが、精霊の力はあまりにも強力で普通の人間はそれに耐えられない。そこで、肉体、精神ともに強靱な人間を探す一方、逆に普通の人間を強化する方法も検討された。その際、伝説の霊薬エリクサーの話が持ち上がったのである。

五番目の元素の凝縮体ともいわれるエリクサーは、かつての巨大な魔道国家であるアミザール帝国で発明されたという。飲んだ者は肉体、精神ともども神の領域に近づくといわれたのだが、帝国の突然の滅亡により、その真偽は謎のまま残された。

魔大戦のさなか、キースとルタオンはアミザール帝国の首都の遺跡へと向かった。そこは死の砂漠の奥にあり、ベテランの冒険者でもあまり向かおうとする者はいない。

だが、キースはドラゴンの姿に戻れば砂漠越えはさほど苦ではない。また、ルタオンは世界中を旅し、冒険者としての経験もつんでいたため、探索を引き受けたのだ。

「ルタオンはエリクサーを発見したんだ。でも、タイラン国に戻ったとき、僕らは聞いてしまったんだ。タイラン王の企みを」

キースが口を挟んだ。

「タイラン王は魔大戦が終わったら、精霊戦士の技術を自軍の兵士に適用しようとしたのじゃ。そんなことをすれば世界のバランスは

一気に崩れてしまう」

「確かに……」

「我々は秘密を守るため、魔王を倒すとすぐに皆で姿をくらませたのじゃ、ただ、エレン姫だけは王家の責務として自分の城に戻られたがの」

「そうだったんですか。それじゃ、お兄ちゃんがずっと帰ってこなかったのは……そうだったんだ……」

「あ、それじゃあ、エレン様にタイランの王子との縁談が持ち上がったのも……!」

「うむ、多少強引だがエレン姫から精霊戦士の力の秘密を引き出すとしたのじゃろう」

「くそっ、何てやつらだ」

「勇者は自らの中に眠る精霊の力を、ルタオンはエリクサーそのものを、わたしは精霊戦士をつくりだす技術を、ミューラスは精霊戦士とは直接関係無いが、兵器開発の技術をそれぞれ奪われぬために姿を隠した。だが、エリクサーが奪われ、ルタオンが殺された今、奴らは本格的な動きを始めると思われる」

「どうすればよいのですか？」

「まずは皆に警告しなければならん。だが現在消息が明らかなのはエレン姫だけじゃ。他の者達は私らで何とか探し出してみよう。お前達はウェアリン国城下町へ戻って姫様に次第を話してはくれぬか」

「え、は、はい!」

ムーザッパがどもりながらも力強く返事する。世界の命運に関わる事件に巻き込まれたことと、生まれて初めて正当な理由でエレンと会話する機会を設けられて彼は興奮してしまった。ルタミナはそれを見て苦笑する。

ムーザッパとルタミナは再び勇者の船フェリアに乗り込み、ウェアリン国へ急いだ。

到着したのは花月9日。エレン姫の誕生パーティーで町はお祭り騒ぎで賑わっているはずだった。

――しかし。

「おかしいな。静かだ」

「そうね。第一、私達が勇者の船に乗ってきたのに誰も何も言いこないわ」

「うん、とりあえず親父のところへ行って状況を聞いてみよう」

――その頃、王女エレンは乱入者と対峙していた。

「よくも！ よくも私のパーティーをめちゃくちやにして、皆を傷つけたわね！許さない、許さないわよ！」

エレンはその漆黒の甲冑に身を包んだ者を鬼のような形相で睨みつけた。自然に体が戦闘態勢をとる。エレンは体術においても一流の技術を誇っている。

彼らの周りにはウェアリン国の兵士達が何人も倒れていた。その中には既に死んでいる者もある。すべてこの甲冑の戦士の仕業だ。武器をつかわず、金属の鎧に包まれた腕で殴り倒して行く。それがその戦士のやりくちだった。

やあ、と掛け声を上げ、エレンは手にしたメイスで甲冑戦士に殴りかかる。すると、戦士はそれを避けるでもなく、手でそれを受け止め握り締めた。

「何っ!？」

華やかなパーティーになるはずだった。

町では屋台を出したお祭り騒ぎを許し、城の中庭は一般人にも開

放されてご馳走の数々が振舞われた。王室に蓄えられた財をふんだんにつかって町を復興してくれた皆へのご褒美にするつもりだった。しかし、その幸せは一人の乱入者によって破壊された。

はじめは町に設置された屋台を壊して回る不逞の輩がいるという報告だった。性質の悪いよっぱらいかごろつきだろうと思い、兵士をよこしたのだが、驚くことにその者は兵士をあっさりと打ち倒したのだった。しかもそいつは城に向かってきているという。

さらに門番や近衛兵までもが束になっても敵わない奴だと報告されると、ついに業を煮やした王国最強の戦士エレンは自ら戦うことを決心した。

メイスを握った力にエレンは驚きを隠せない。

「そんなバカな……こいつ、力だけなら上位魔族並みだわ。どうしてこんな奴が今ごろ……くっ、最近、戦闘訓練なんて全然していなかったからな…、キツイ……」

エレンはらしからぬ弱音を吐いてしまった。体が1年前に比べてずいぶんなまっている。魔族のうちの大物はすべて自分達で打ち倒したと思っていたのに……。

膠着状態を打破するためにエレンは素早く身体を回転させ、もう片方の手で甲冑戦士の腕を殴る。ひるんだところでメイスを取り返し、構えなおす。すると戦士もモンク僧のような構えを取った。

そしてまるで子供のケンカのような泥臭い打ち合いが始まる。そのうちメイスはそのパワーに耐え切れず折れて使い物にならなくなってしまった。

打撃は何度もヒットしている。甲冑戦士の兜の下顔は見えないが、痛がるような反応は見せていることからダメージを与えつつけていることは確実だ。だが相手は限りなくタフだった。ついにエレ

ンの息がきれ、片膝をついた。甲冑戦士は無言でその様子を見つめる。それが自分を見下した態度にみえたエレンは怒りを外に向けず、内に向けることで氣力を込めなおした。

「……父上、城のみんな、ごめんなさい。私、今から本気で戦うから。お城、ちょっと壊してしまうかもしれないけど許してね」

エレンの目つきが変わった。全身が鈍く光り、彼女から凄まじい闘気が溢れ出してくるのが判る。彼女の中の精霊の力は今から開放されようとしていた。

ガルガニスから事情を聞いたムーザツパとルタミナは装備を整えると城へ向かって走っていた。間違い無い。既にタイラン王国側もエレン姫に手を伸ばしていたのだ。

二人が城に着いた時には、エレンと甲冑戦士との戦いの真っ最中であつた。

そこで二人はこの世のものとも思えぬ戦闘光景を見ることになる。

「・「・ツ・「・キ・蜴シ・ネ！」

エレンが呪文を唱える。空間の裂け目から高压で打ち出された水流は甲冑戦士を直撃した。戦士は一瞬よろめいたがすぐに体勢を立て直して水流をよけ、ジグザグに走りながらエレンに向かって走り出す。

狙いを定められなくなったエレンはすかさず地面を蹴って違う呪文を唱える。土がごぼごぼと盛り上がり、足をとられた甲冑戦士はバランスを崩した。そこへエレンのパンチが炸裂する！しかし戦士は何やら呪文を唱えるとふわりと体を宙に浮かせ、エレンの攻撃から逃れた。

しかしエレンは一瞬眉をひそめたものの、すぐそばにあったパー

ティー用の長いテーブルの足を掴むと、軽々とそれを持ち上げ、虫でも落とすかのように甲冑戦士に叩き付けた。不意をつかれた戦士だったが、素早く反応し腕でテーブルを受けとめる。テーブルは粉々に砕け散った。

「甘いっ！」

滞空位置が低くなった甲冑戦士のところへエレンはジャンプし、渾身の力を込めた手刀を振り下ろした。今度こそ防御するいとまもなく、戦士の右腕は刃物で斬られたように肩からざっくりと切り落とされた。右腕が地面に落ち、そして痛みで体をこわばらせている戦士が地面に降りてきた。

エレンはハアハアと荒い息をたてながらも、勝負あったと思った。だが。

甲冑戦士は左腕で右腕を持つと、それを元あった場所に当てた。そしてつぶやくように呪文を唱えると腕は元通りくつついてしまった。

エレンは驚きを隠せずにいられなかった。こんな化け物じみたことができるのは……自分達だけだと思っていたから。そうでないのなら……。

「エリクサー！」

エレンの発した単語に甲冑戦士はあっさりと反応を見せた。それでエレンは確信した。

甲冑戦士も自分がタイラン王国の手の者であることをエレンに悟られたであろうことに気づいた。

「エリクサーを飲んだ戦士、道理でそんなに強いはずよ」

甲冑戦士は開き直り、余裕ありげなポーズをとった。そして兜の

奥から男の声を発する。

「エリクサーの力は素晴らしい。魔王を倒した勇者様と互角にわたりあえるのですからね。いや、私のほうがまだ体力が残っているからこちらが有利ですか」

エレンの額には普通の汗に混じって冷や汗も浮かんでいた。

「うぐっ」

疲労でスキを見せてしまったエレンのボディに重いパンチが容赦なく叩きこまれた。彼女の意識がぐらりと揺れた。

私じゃ、勝てない……。助けて、アルゴ……。

エレンは愛しい人の顔を思い浮かべた。

ムーザッパは思わず飛び出した。

「姫様ああ!!」

ルタミナは彼を止めようとしたがその手は空を掴んだのみだった。

「ムーザッパ! 行っちゃ駄目!」

ルタミナの叫びも彼には届かない。

エレンは朦朧とする意識の中でこっちに近づいてくる人間を見つけた。

アルゴ…！？ アルゴなの？

だが、それは別人だった。傭兵の風体をした自分の知らない人間だ。

「よくも、エレン様を！エレン様から手を離せ！」

剣を振り上げて甲冑男に襲いかかる。

だめ、来ちゃだめ！殺される！

「ええい！邪魔だ！」

甲冑男は腕を一振りすると、容易くムーザッパをはじき飛ばした。ムーザッパは声もなく城壁に向かって一直線に飛んで行く。

ああっ……！

エレンは悲しげにその様子を見て、意識を失った。

「ムーザッパ！」

ルタミナは飛ばされる彼の体を咄嗟にかばおうとしたが、その彼の体にはじかれてしまった。わずかに飛ばされるスピードを落としたのみである。彼は城壁に叩き付けられその場に落ちた。動かない。激痛に耐えつつ戦士の方を見ると、彼は何らかの目的でエレンの身体を抱え上げるところだった。

ムーザッパは自分のあまりのふがいなさに歯噛みした。

「くそっ、レベルが違いすぎる……。駄目なのか、俺では、駄目な

のか……！」

その時だった。

「待てえ！」

上空から声がした。釣られるようにムーザッパも甲冑戦士もそちらを見上げる。

一人の男がどこからともなく飛び降りてきて、二人の間に立った。その姿は有名人のものだった。

「勇者様……」

戦況を見つめていた群衆のうちの誰かがつぶやいた。

「エレン、君の呼ぶ声が聞こえた！」

だが、エレンは既に気絶している。

「勇者アルゴ……、今ごろ……」

ムーザッパがつぶやいたがアルゴには届かない。

甲冑戦士はアルゴとまで戦う気力はないようだった。

「勇者アルゴ……今の俺の状態では勝てない。さらばだっ！」
「待てっ！」

「勇者アルゴ！ パートナーを助けたければ『エリウム洞窟』へ来い！そこで待っている！」

そして甲冑戦士は空間転移の呪文を唱えた。後を追うようにアルゴもまた同じ呪文を唱える。

ムーザッパは取り残され呆然とするしかなかった。だが、体に激しい痛みが走り、やっと我に返った。骨が折れていた。

初恋

ムーザッパは夢を見ていた。

いつものようにエレンが登場している。だが、そのシチュエーションはいつもと随分違っていた。

闇の中。そこでエレンだけが闇に溶けず、ムーザッパの目の前で静かに微笑んでいた。ムーザッパは手を伸ばすが、なぜかどうしても彼女に触れることができない。エレンはそんなムーザッパに対し、変わらぬ微笑を浮かべていた。ムーザッパにはそんなエレンがまるで自分を哀れんでいるか軽蔑しているかのように見えた。

「エレンさまあ」

悲しげにムーザッパは声を上げる。

エレンは微笑を全く崩さず、くるりと彼に背を向けるとすたすたと歩き出した。

「エレンさまあ！」

彼はその後を追って駆け出した。しかし何故か走っているのに、歩いているエレンに全然追いつくことができない。二人の距離はぐんぐん離れていく。

やがてムーザッパの視界でエレンの姿は豆粒のように小さくなり、そして消えた。ムーザッパはがっくりと膝をつき、うなだれた。

「駄目だった。俺じゃ駄目だったんだ。エレン様につりあいのとれる男になるなんて、所詮夢に過ぎなかったんだ」

「それでいいのかい？」

頭上で声が聞こえた。つられてムーザッパが頭を上げると、目の

前に道化師姿の仮面の男が立っていた。夢の中なので驚きはなかった。

「君は？」

道化師はその質問に答えず、ムーザッパに向かってもう一度言葉を投げかけた。

「それでいいのかい？ 君は本当にエレン姫を諦めてしまうのかい？」

「俺は……俺は今日、生まれて初めて『ケタ違い』という言葉を実感したよ。俺は姫様の為に何もしてやれなかった。何も、何も、何も！ 俺なんか一生かかってもたどり着けない世界にいるんだよ、姫様は」

「ムーザッパ……」

「？」

道化師は虚空に向かって手でぐるりと円を描いた。するとその円の中にとある風景が現われた。

そこは森の中。幼き少年と少女が向かい合って何か言葉を交わしている。

ムーザッパにとって懐かしい光景だ。懐かしいところではない。

決して忘れまいと心に誓った光景だ。

それは彼が初めてエレンと出会った日……。

その日ムーザッパは城を取り囲む森の中で一人で遊んでいた。お昼頃に何やら騒がしい音が聞こえたので行ってみると、綺麗なドレスを無残にも泥だらけにして遊んでいる女の子を見つけた。彼女は彼に気が付くとニイと笑った。彼女こそ城を抜け出して遊びまわっているエレンであった。二人はほんの少しの間一緒に遊んだだけだったが、それは彼にとって忘れられない記憶となった。その日の晩

は胸がドキドキして寝付かれず、次の日からも彼女に会いたくて毎日森へ足を運んだ。ムーザッパは素性も知らぬまま彼女を『プリンセス』と呼ぶことにした。それがムーザッパの初恋だった。森で彼女と出会うことは二度となかったが、それからしばらくたった収穫祭の日、彼は彼女の正体を知ることになり、驚いた。彼女は本当にプリンセスだったのだから。

「君が初めてエレン姫と出会った日のこと、覚えているかい？」

「覚えてる……忘れるもんか。あの時、俺は彼女がお姫様だなんてことも知らずに一緒に遊んだんだよね……。でも、身分とかそんなこと関係無かった。あの日からエレン様への俺の気持ちはずっと続いていたんだ」

ムーザッパは胸に手を当て、再びエレンのことを想った。

苦しくない。温かくなっているだけだ。

「そう、俺の気持ちはあの日から全然変わっていない」

ムーザッパの様子を見て、道化師は仮面の下で低く笑った。

ムーザッパは見慣れた自分の部屋で目を覚ました。ルタミナが連れてきてくれたのだろうか。不思議なことに体のどこも痛くない。彼は起き上がって自分の身体を点検したが、どこにも傷がない。骨が折れたと思ったのに……。ムーザッパは部屋を出て1階へ下りていった。

テーブルを挟んで3人の人物が小さな声で会話をしていた。ルタミナ、ガルガニス、そしてもう一人は浅黒い肌に黒髪の少年……。キースだった。

3人はムーザッパに気づき、彼の方を見た。

「あつ、ムーザッパ。起きた？おなかすいたでしょ？御飯食べる？」

ルタミナは驚くほど優しく声を掛ける。

「なあ、ルタミナ…、俺、骨折してなかったか？」

「ああ、それはね、キースが治してくれたのよ」

「おじゃましてます。ムーザッパさん。実はあなたがたが出発してしばらくたった頃、ウェアリンのあたりでとてつもなく巨大なパワ―をサクラ様が感知されたので、僕が遣わされたのです。結局間に合わず、僕は何も出来ませんでした」

キースは申し訳なさそうな顔をして頭を下げる。

「そんなことないわ。キース。あなたの治癒魔法のおかげで怪我をした人達が随分助かったもの」

「そうか、キースのおかげか…：ありがとう」

ガルガニスが開き、ムーザッパを見る。

「ムーザッパ、話は大体聴いた。大変なことに巻き込まれてしまったな。だが、ここまで手を引かないか？これは今のお前達では手におえる事態ではない」

「親父、俺は…」

「そうよ、ムーザッパ、もうやめよ？ 今度のことで身にしてみて判ったでしょ。私達とは次元が違う世界の話なの。私達の役目はもう終わったわ。あとはキースや勇者様達に任せましょ」

「僕はこれからアルゴ様を追いかけてサポートします。アルゴ様はエレン様救出のためにエリウム洞窟へ向かわれたそうですが、間違い無く敵はワナをはってアルゴ様も手中にいれようとするでしょう。だから……」

キースの言葉をムーザッパが中断させた。

「キース、俺も、俺も連れて行ってくれ」

「ムーザッパ！」

ルタミナは叫ぶと泣きそうな顔をしてムーザッパに抱きついた。

「ねえ、お願いだからもうやめて。死に行くようなものじゃないの。私、この間溺れそうになった時思ったの。死にたくないって。人はそんなに簡単に死んじゃだめだって。あなたの気持ちも判る。でも、気持ちだけではどうにもならないことだってあるのよ」

けれどもルタミナはムーザッパがどう答えるかは判っていた。こんな風にいわれると逆にムーザッパは意地を通してエレンを追いかけるであろうことは判っていた。

ムーザッパはゆっくりとルタミナを引き剥がすと彼女の目を見て言った。

「ルタミナ、でも俺は後悔したくないんだ。たとえ結果がどうあろうと、引いちゃいけない時ってあるんだ。俺にとっては今がその時だ。俺はエレン様を本気で愛している。その気持ちに正直になった俺の結論がこれだ」

ルタミナはこれまでムーザッパの一途な気持ちにあきれることは何度もあった。でも今は少し違う感想を持った。

「ムーザッパ、あんたって……判った。だったら私もついていく。人数が多い方が死ぬ確率は少なくなるでしょ？」

「ありがたい、ルタミナ。でも、俺、死なない。さっき、あのヨロ

イ野郎に殴り飛ばされた時、何かつかんだ気がするんだ。キースに治してもらった今の俺はすこぶる気分がいい。ものすごく体が軽いんだ。もちろん勇者レベルではないけれど、さっきまでの俺から一皮むけた感じがする」

ルタミナはムーザッパが頭を打ってハイになっているだけかとも思ったが、そうではないようだ。彼はとても落ち着いており、いつもと雰囲気は違っていている。強がりではない、確かな自信にあふれていた。

少しだけカッコよく見えた。

そしてムーザッパ、ルタミナ、キースの3人は再び勇者の船に乗ってエリアム洞窟へと向かったのだった。

サイレン再び

エリアム洞窟は『ネズミのしっぽ』とあだ名される岬の先端にあり、現在もなお魔物の生き残りが群れをなして住んでいる危険な場所である。もともとこの地域はフエリアのホームグラウンドであり、最も効率よく進むことができる海路を彼女は知っていた。

魔物の声がときどき聞こえてくる洞窟の前でルタミナはムーザッパに声を掛けた。

「ねえ、ムーザッパ。おじさんはあんたのこと信頼しているから何も言わずここまで来させてくれたのよ。絶対、死んじゃだめよ」
「判っている」

出発が決まるとガルガニスとムーザッパは武器庫の中で最高級品の剣と鎖帷子を渡してくれた。それらを使いこなせると判断した父の判断だった。

そしてもう一つ、ドラゴンの鱗に紐を通した首飾りを渡してくれた。それは赤ん坊のムーザッパがかつてルタミナの家の前に置かれていた時、一緒に籠の中に入れられていたものであった。昔からドラゴンの鱗は男の子のお守りとして重宝されている。

お守りを手にするムーザッパにキースはものめずらしそうな視線を向けた。

「ムーザッパさん、あなた不思議な物を身につけてらっしゃいますね」

「え？　これか？　竜の鱗が？　だって、キース、君はドラゴンだろ？」

既にサクラからその辺の事情は聞いていた。

「ええ、そうですけど、その鱗はアマルトドラゴンのものですから」「何ドラゴンだって？」

「アマルトドラゴン、です。僕がまだサクラ様に会う前から絶滅の危機に瀕していたドラゴンです。確か現在では年老いた女のドラゴンしか生存していないと思いました。ちょっと失礼……」

そう言ってキースはムーザッパの首飾りを見つめなおした。

「やはり不思議です。これは100歳に満たない若いアマルトドラゴンの鱗です。なぜ、ムーザッパさんをお持ちなのですか？」

ムーザッパには答えようがなかった。それに今はそんなことに頭を使っている場合ではなかった。自分を捨てた親のせめてもの愛情表現なのだろう。ムーザッパは自分がどんなに幸せな環境にあるかを胸に刻み込んだ。

洞窟に一步入ると、魔物たちの殺気がビリビリと伝わってくる。だがムーザッパに恐怖心は無かった。

「行こう」

そして程なくルタミナは同行者達のパワーに驚かされることになる。

ムーザッパは自分で語った通り、剣を振るう動きに飛躍的な進歩が見られた。無駄がなく、感情にまかせて乱れることも無い。また、キースは武器をつかわず己の肉体で襲い来る魔物たちを次々と打ち倒して行った。そして戦闘に区切りがつくと、魔法の力で皆の体力を回復。ルタミナは楽が出来たのだが、ちょっとだけ疎外感も味わった。

洞窟は天然の鍾乳洞と、それらをつなぎ合わせるように作られた人工の部分とで構成されている。人工の部分は床が平坦で多少歩きやすい。そして時々勇者アルゴの通った痕跡を見ることができたので彼らはそれを追っていた。幸い、通り道に仕掛けられていた数々の罠は、動作したり、解除された後だったので障害は少なかった。どれほど歩いただろうか。下り坂と上り坂を何度も繰り返し、自分らが今どこらへんにいるのかも見当がつかなくなった頃、キースが小さく声を上げた。

「どうしたの、キース？」

「血です」

床におびただしい量の血液がぶちまけられていた。しかも、まだ流されてから間もないものだ。

「近い。もうすぐだ……」

「ムーザッパ、こっち！ 何か聞こえる！」

ルタミナの導きでムーザッパとキースは洞窟の通路の一つを走る。

聞こえる。若い男の声だ。洞窟内の壁に反響して奇妙な音となって聞こえてくる。

「さあ、もう、逃げられんぞ。おとなしく観念してエレンを返せ！」

アルゴの声だろうか。聞くことに集中していると今度は女性の歌声が聞こえてきた。場に不釣り合いな歌声に、ムーザッパらは顔を見合わせる。

通路はしばらくするとだんだん狭くなっていったが、突然開け、広い空間に出た。

そこは鍾乳洞になっていた。たいまつの明かりがぼんやりと洞窟内を照らしている。地面のあちこちには水溜りが出来ており、足場が悪い。そしてそこに、彼らが追っていた人物達がそろっていた。

だが、彼らを見たルタミナ達はその様子にぎよつとした。洞窟の中央付近の水溜りに美しい半裸の女性がいる。彼女が歌声の主だ。彼女はルタミナたちのよく知っている魔物、サイレンだった。

彼女は一人の人物を見つめながら唄っている。その人物とは、他でもない、勇者アルゴだ。彼は焦点の合わない目でふらふらとサイレンに近づいていく。彼がサイレンの魔力に魅せられてしまったのは明らかだ。

洞窟の隅には鉄製の檻があり、さるぐつわを噛まされた王女エレンが閉じ込められていた。アルゴの様子を見て何か叫ぼうとしているが声が出せない。

エレンの檻そばには甲冑戦士がいた。自失して隙だらけのアルゴの背後に回り、頭を殴りつけた。ぼつたりとアルゴはその場に倒れる。甲冑戦士はその身体を抱えあげる。気絶しているのか抵抗が無い。

「アルゴ様！」

キースが叫んで踏み出した。響き渡ったその声に気づいた甲冑戦士とサイレンがこちらを見る。

「ん？ まだ邪魔者がいたのか？ 面倒だ。フィーネ殿、ついでにあやつらもそなたに任せる。私はこの二人を連れて実験室に戻る。協力を感謝するぞ」

甲冑戦士はエレンの入った檻をひょいと持ち上げる。フィーネと呼ばれたサイレンは嫣然と微笑む。

「ホホホ……。勇者と言えども所詮ただのオトコ。わらわの魅力に屈しないオトコはおらぬわ。それより約束は守ってもらうぞよ」
「わかつている。エリクサーの分析が完了したならそなたにも飲ませてやろう」

そう言うのと甲冑戦士は呪文を唱え、抱えた二人の勇者と共にその場から姿を消した。

「あっ！ くそっ！」

「アルゴ様、エレン様！」

「そんな……勇者様までが……！」

ルタミナが震え声でつぶやく。勇者とは無敵でいかなる魔力にも屈しないという、サーガに謳われような存在だと思っていた。その幻想が碎かれ、身体から血が引く。と、不意に耳に歌声が流れ込んできた。フィーネが妖艶な笑みで再び歌いだしていた。

「フフフ……」

ルタミナは咄嗟にムーザッパの方を見る。これが話に聞いたサイレンの魔力ならば真っ先に彼が危ない。

「ムーザッパ？」

だが、彼の様子に変化は見られなかった。キースの方も見てみるが、こちらもムーザッパ同様、戦闘態勢で身構えた状態のまま特におかしなところはない。おかしなところがないのがおかしかった。

サイレンから表情が消え、唄うのをやめる。

「な、なに、なにゆえじゃ！ 何故そなたらは、わらわの歌を聞いても何ともないのじゃ！ どんな男でも、例え勇者であろうと、回避不可能なのに」

「え、だって、私は一応女だし……」

「僕はこれでもドラゴンだから……」

「俺の心はエレン様だけのものだからな！」

「……」

「ルタミナ、キース、エレン様がここにいなくなった今、いつまでもこんなところでグズグズしていてもしょうがない。戻って次の行動を考えよう」

三人はうなずきあい、来た道に戻りかける。その時。

「キシャーッッ！」

サイレンは水辺から飛び跳ねた。そして叫び声と共に、一番気に入らない答えをしたムーザッパに飛び掛ってきた。

「痛つつう……」

ムーザッパの肌が鎧の継ぎ目のところから切り裂かれ、軽く出血した。

「よくもわらわに恥をかかせたな！ 八つ裂きにしてやる！」

聖母のようですらあった微笑を浮かべていた彼女はみるみるうちに醜悪な形相を露わにし、その身を魔物へと転じていく。両腕両脚に鳥の羽根のようなものが生え、その先端に鋭い鉤爪が伸びた。

ルタミナとキースはムーザッパを補佐するためにステップを踏んで戦闘フォーメーションを形作る。

振り下ろされた鉤爪を剣の刃で受け止め、弾き返す。フィーネは羽根を広げてその衝撃を緩めて着地する。

と、そこを狙ってルタミナが足元にスリングの石を投げつけ、バランスを崩す。

「小癪な真似をつ。■！」

サイレンは大袈裟な動作で両腕を広げる。ふわりと羽根が抜けて舞ったかと思うと、不意にそれらが意志を持ったかのように動きを変え、分散して3人に向かっていく！

いくつかは叩き落したものの、払いきれなかった羽根が三人の鎧の弱い部分に突き刺さる。ダメージは少なくとも鋭い痛みが動きを鈍らせる。

「魔法か！」

キースが身体に刺さった羽根を手で払い落としながら怒鳴る。

「わらわを歌うだけの妖魔とも思うたか！ ドラゴンの化身のクセに無知な奴じゃ」

「だったら僕も、」

キースは身構えて呪文を唱えかける。が、途中でその動作をやめた。

「今の羽根、魔法封じか」

サイレンは見下したように微笑む。

「じゃあ、魔法の使えない俺たちには関係ないな。キースは下がっ

ててくれ。行くぞ！ ルタミナ、援護頼む」
「やるっしえ」

ムーザツパは大きく息を吸い込むとサイレンに向かってダッシュし、斬りかかる。それをサイレンは鉤爪を使って受け止めるが、彼は慌てずそのまま押し込むように力を込めて傷をつける。

いける……！ こいつは神話の時代からの魔物だが、不死身の化け物じゃない。俺の力でも勝てる！

「ふん、馬鹿力だけで勝てる訳が無い」

サイレンは何とかムーザツパの剣を振り払い、その羽根を使って中空を飛ぶ。ムーザツパの剣が届かないところで体勢を立て直す。そうしようとしたところで、ルタミナのスリングの石が飛んできた。サイレンは舌打ちする。

「くうっ、よくも、よくも……」

フィーネは傷をつけられた胸を押さえながら呻いた。

「憎たらしいが、エリクサーを飲まぬうちから無駄に危険を冒すのもバカバカしい。お前たちの相手はここまでだ！」

そう言ってムーザツパたちが抜けていこうとした通路を先に行ってしまう。

「逃げるのか！ ……っと、まあいいや。殺すことが目的じゃない。さ、早く行こう」

と、自分たちも出口へ向かおうとしたとき、洞窟の壁に反響して、何やら呪文らしい声が聞こえた。

「■■■■！！」

次の瞬間、大音響と共に洞窟内を激しい地震が襲った。鍾乳石が途中から折れて落ち、天然の凶器となって彼らに襲いかかる。

「やばい、逃げるぞ！！」

しかし、ムーザッパの掛け声にも、激しい揺れが彼らの足止めをしていた。

「あっ、通路が！！」

狭い入り口の奥の通路の天井が崩れ、進路を阻んだ。

「くそっ！」

慌ててムーザッパは崩れ落ちてきた岩の破片を払おうとする。

「危ない！ そんなことしてもすぐまた崩れ落ちてくる！」

ムーザッパは舌打ちして手を止めた。しばらくすると呪文の効き目が切れ、地震は収まる。しかし完全に退路は絶たれてしまった。地震の衝撃で壁に取り付けられていたたいまつは落下して火は消え、空洞は闇に包まれた。ルタミナは手探りで自分の荷物をあさり、ランタンに明りを灯した。

3人は他の出口を探したが徒労に終わる。何もすることが無くなった彼らは腰を下ろして食事をとることにした。気力はまだまだ充

実している。だが、どうやって脱出しよう？

諦めたわけではないのに打開策が見当たらない。もどかしい。

とりあえず、食事が終わったら手分けしてもう一度洞窟内を調べようということになった。

ドラゴン

ムーザッパが入り口にたまった岩の欠片を退ける作業を再開しようとする、ルタミナが横から声をかけてきた。

「ねえ、ムーザッパ、ひょっとして私達もう、ここで終わりになっちゃったりするのかな？」

「お、おい、変なこと言うなよ」

ルタミナらしからぬ発言にムーザッパは元氣付けるため、半笑いに言う。

「人間の最期って、ドラマチックだとは限らないものね」

「ルタミナ、どうした！ 弱気になるなよ。俺達はまだ生きている」

「ムーザッパ、私……」

ルタミナはムーザッパの手をとると、そこにそっと自分の手を重ねた。

「あっ」

その時キースが大きな声を上げたので、ルタミナの言葉はそこで遮られた。二人はキースが立っている方へ向かい、彼が見つめている方向を一緒に見た。

洞窟の隅の方の光景がゆらゆらと揺れている。そこに何かがゆっくりと現われた。その姿は魔法使いのサクラらしいと判った。ただ、それに生身の人間の気配はなかった。

「サクラ様！」

キースはその影に声を掛ける。肩越しに二人を振り返ると解説を入れた。

「サクラ様の魔法です。サクラ様は水晶球をつかってこのように遠く離れた場所に自分の姿を映し出して相手と連絡をとれるようにしているのです。……サクラ様、僕です。キースです。映像が届いています」

「おお、キースか」

サクラの姿が鮮明になるにつれ、彼女の様子がおかしいことに気づいた。

「サクラ様……！ どうされたのです？ そのお怪我は！？」

「奴らが来おった。精霊戦士の量産に協力しろと迫ってきおった。もちろん断ったがそうしたらこのとおり拷問してきおった」

「なんてこと……！」

「そっちの様子はどうかじゃ？」

「すみません。エレン様もアルゴ様も奴らの手に……」

サクラの映像がぶれる。怪我と相まって魔法の力を使うのが辛いのかも知れない。

「これで奴らにエリクサーと4大元素の精霊の力という要素がそろってしまったわけじゃな。これでは私が何もしくとも近いうちに真の精霊戦士が誕生してしまう。宮廷魔術師は何も私だけではないからな」

「どうすればよいのでしょうか？」

「キース、もはや私も確実な話は出来ぬ。ただ、一旦私の家に戻ってみてくれんか？ 奴らは私自身を捕まえることに重点を置いていた

から、隠していた研究書類までは荒らされずに済んだはずじゃ。例の場所の、判るな」

「は、はい。でも、そこに何が……」

「おまえとルタオンがアミザール探索に行ったときの報告書を私なりに研究して整理したものがああるのじゃ。その中には魔法の呪文もいくつか記されていた。だが、いくら私が試しても発動しなかったのじゃ。ひょっとしたらその中に精霊戦士に対抗できるものが隠されているかもしれん。キース、それをお前が見つけ出すのじゃ」

「で、でも僕の魔法の知識はサクラ様には遠く及びません、そんなこと無理です！」

「馬鹿者！……ぐっ」

サクラは叫び、自らの怪我の痛みを深めてしまった。

「諦めるな。仮にもわたしの研究をいつもそばで見ていたおまえじゃ。お前が一番頼りになるんじゃ。……時間が無い。頼む」

サクラの映像がまた歪んだ。

「サクラ様！？」

「わたしはもう身動きがとれん。お前達が最後の希望なのじゃ。頼む、頼むぞ……」

「サクラ様……！」

サクラの映像が徐々に薄れ、そして消えてしまった。それは彼女にこれ以上魔法を行使し続けることができなくなったということだ。

「サクラ様 ああー！ー！ー！！！！」

キースの悲痛な叫び声が響き、また洞窟内の天井や壁に衝撃を与

えた。

「キース……」

ムーザッパは彼に何か言ってやろうと肩に手を触れた。

「!？」

彼の肩の肌触りが異常だったのでムーザッパは反射的に手を離れた。

「キース、おまえの体……?」

「え?」

彼の体に異変が起こっていた。体色が変化し硬度も変化していた。

「あ、僕……」

「ウロコ!？」

彼の体は鱗で覆われ始めた。徐々に体全体が大きくなり、着ていた衣服が破けていく。

「あ、あ、あ……」

ムーザッパとルタミナは後ずさりする。

キースは今や巨大な翼を持つ暗緑色の爬虫類、すなわちドラゴンの姿を取り戻していた。サクラの魔法が解けたのだ。彼は巨大な体を起こし、辺りを見まわすとハッと気づいたように翼をはためかせて宙に浮き、勢いをつけて洞窟の天井に体当たりをした。不審がる人間ふたりをよそに、その行為を何度か繰り返すと、天井に穴がある

き、そこから懐かしい太陽の光が差込んだ。

「ルタミナさん、ムーザッパさん、行きましょう」

キースは降りてくると背中に二人を乗せ、静かに穴から地上へと運んだ。そこは四方を岩山で囲まれた荒野だった。

「た、助かった…」

ルタミナとムーザッパは地面に腰をつけて同時につぶやいた。しかし、落ち着く間もなくムーザッパは続けざまに叫んだ。

「わっ！ 何だ、何だあれは！？」

空を見上げたムーザッパはそこに奇妙なものが浮かんでいるのを見つけた。ルタミナとキースはその声につられて自分らも空を見上げ同様に声を上げた。そこには例えるなら大きな膨らんだ魚を模したものが浮かんでいた。生き物ではない。人間が作り出したものだ。彼らにはそれを何と呼んだらいいのかわからなかったが、それは小型の飛行船であった。それはゆっくりと高度を落とすと、彼らの見守る前で静かに降り立った。そして飛行船の腹の辺りがめくれるように穴が開き、そこから人の姿が現れる。それを見てキースが驚きの声を上げる。

「ミューラス……」

そう呼ばれた人物はキースに向かってにつこりと微笑むと駆け寄ってきた。

「久し振りだな。キース！ どうしたんだ？ 人間として暮らすと

か言ってたのに元の姿に戻って……。ん？ ルタオンじゃないか！
お前まで！ 久し振り！」

ミューラスはそう言って馴れ馴れしくルタミナの肩をつかんだ。
ルタミナは小さく悲鳴を上げた。その声でミューラスは人違いに気づいた。

「あれ？ お、女の子！？ いや、これはこれは、失礼…」

大空をドラゴンと飛行船が並んで飛んでいる。飛行船の中の部屋でムーザッパとルタミナは元タイラン王国の技師ミューラスにこれまでの経過を説明した。ミューラスは腕組みをしながらそれを聞いていた。

「俺は自分の家で勇者の船のチェックをしていたんだ。そしたらウエアリンにいつも留まっているはずの船が動いているじゃないか。これは何かあるなと思って俺のこの最新の発明で船のある場所に来てみたんだ。そしたら崖崩れが起きているもんだから付近の様子を見に行ったら……キースの姿を見つけたという訳よ」

「この乗り物は何ですか？ 浮遊の魔法みたいですが」

ムーザッパは興味本位で聞いた。

「いや、魔法の力は一切使っちゃいないよ。科学の力だ。これは空気より軽いガスを利用して飛んでいるんだ。俺は飛行船と名づけたがね。ふふ、俺もこれで陸、海、空と制覇したわけだ。次は……」

ムーザッパはなんとなくこの人物が気に入った。年齢はムーザッパより少し上、もじやもじや髪に不精髭というのが怖い印象を与え

ている。しかし話をしてみると気さくでユニークな思考の持ち主であることが判った。

同意を求めようとムーザッパはルタミナの方をみたがどういうわけか、彼女は少しぼうつとしている。

「それにしても、ルタミナちゃんて、兄貴とは違っておとなしくて可愛い娘だね」

「そ、そんな、可愛いだなんて、そんなことないです」

ルタミナは真っ赤な顔をして否定する。

かわいい？　ルタミナが？

ムーザッパは疑問に思ったが口には出さなかった。それにしてもルタミナの様子はおかしい。ミューラスはそんなルタミナをみてますます可愛いと思ったのかにつこりと笑って彼女を見つめた。

「あ、そろそろジェムの町だぜ。今から高度を下げるからどこかにつかまってる」

ミューラスは操縦席に向かった。

町の側に降りるとムーザッパとルタミナはキースから書類のある場所を聞き、サクラの家に向かった。そこは無残に荒らされた跡が残っていた。

「早くしないとね」

「おう。一刻も早くエレン様をお助けしないとな。……ん？」

ルタミナはいつもの調子を取り戻している。

「おい、ルタミナ。お前、さっきはどうしたんだ？」

「え？」

「だから、なんであのミューラスさんと一緒にいるとき変だったんだよ」

「え？ え？ ええ？ 変だった？」

ルタミナはとぼけようとするが、それが出来ずに顔を赤らめてしまう。

「ルタミナ……。まさか、お前、ああいうのが好みなのか？」

「え……。うん……。まあ、ちょっと好みのタイプかな、なーんて、あはは」

「なんとお」

「何よ、妬いてるの？ ……って、あんたに限ってそんなわけないか。愚問だったわ」

「……」

「まあ、ね。これからはムーザッパのこと、馬鹿にできないね。一目惚れって本当にあるんだ。……。い、今はそんな話をしている場合じゃないでしょ？ 書類、書類」

キースの言う通りの場所にその書類はあった。なにやら訳がわからない文字でいっぱい埋められている。魔法にはとんと疎い二人には理解し難いものだった。ミューラスは魔法ではなく科学を用いる人間なのでやはり造詣が深くない。キースだけが頼りとなるのだった。だが、キースが中級魔法を操る力を持っているとはいえ、古代の魔法の秘密をいきなり解けるほど話はうまくいかなかった。

ムーザッパは次第にじりじりとしてきた。ここでただじっとしていきくらいいなら、すぐタイラン国に向かって実験の成功する前にエレンを助け出すほうがいいのではないかと思わずにはいられなかった。

全滅

ムーザッパはひとり、タイラン王国の首都タイランの城塞都市の門をくぐる。ジェムの町から首都タイランまでの距離は歩いて十日程度だった。

ルタミナ、キース、ミューラスさん、ごめん。でも俺、じっとしてられなかったんだ。提案したところで絶対却下されるだろうし。

置いてきた仲間に関心の中で詫げる。彼は皆に黙ってやってきたのだ。

しかし自分の行動に後悔はしていない。愛する者を救うため、可能性が低くても自ら彼女を救う手段を選んだ彼はぎゅっと目を閉じ武者震いした。

タイラン国は武勇を誇る国と呼ばれており、住民はウェアリン国のそれに比べ、男性も女性も体格ががっしりして顔つきも凛としている。町を歩く人々の様子はにぎやかだが平和で、他国に戦争を仕掛けようなどというギラついた野望は見受けられない。

魔道実験室のある王立魔道研究所に向かう道のりは道標が出ていたので迷うことはなかった。王城から少し離れた人通りの少ない場所にはそれは立っていた。王家の土地だが商用、居住用にするには交通の便が悪く遊んでいた土地であろう。

その入り口の門の前には見張りの兵士が二人立っていた。ムーザッパは気づかれないよう道を離れ、藪の中に身を隠して様子を伺った。

兵士達は退屈そうに時々あくびをしながらおしゃべりをしていた。

「おい、そろそろ、交代の時間じゃないのか？」

「……だよな、そうだよ。畜生、アイルとロンの野郎、早く来いよな」

「全く、俺達の迷惑も考えろってんだ。こんな退屈な見張りなんて、もううんざりだぜ」

「おい、もう、どうせだから俺達ふけてしまわねえか？」

「え？ そりゃまずいんじゃないのか？ 隊長にどやされるぜ」

「悪いのは時間を守らないあいっらだ。全部の責任は向こうにある。もう、行こうぜ」

「そう……だな。ちょっとぐらい目を離してたってどうせ誰も来ねえしな」

ムーザッパは今こそチャンスだと思った。見張り兵が去るのを見届け、藪から飛び出そうとする。だが、横合いから話し声が近づいてくるのを聞きつけ、慌てて元の場所に戻った。

建物の右側から二人の男が現われた。一人は黒いマントに鎖帷子をまとった壮観な中年の戦士だ。体格や声があ甲冑戦士を想起させるが確信は持てない。もう一人はローブをまとったベテランの魔道士らしい髭面の男だ。

ムーザッパは身を隠した場所で気配を殺し様子をうかがう。

甲冑戦士は研究所の入り口に誰も見張りがいないことに気がついた。

「何だ！ 誰もいないではないか。怠慢な。あいっらめ、さぼったな。後で罰を与えねばならん。中では重要な研究がすすめられているというのに」

「まあまあ、騎士隊長どの、末端の兵士にはこれがどんなに重要なことかというのは知らせていないのですから」

「だが、規律がゆるんでいるのは見逃せない事実だ。魔大戦時にはもっと我がタイラン軍は士気が高かったぞ。平和ボケではないのか。こんなことでは精霊戦士の力を与えてやる気にもなれん」

魔道士は苦笑する。

「そうだ、フーゲル殿、エリクサーの方は大丈夫か」

「万全です。私の家の地下に大切に保管してありますから」

「今はまだ、エリクサーのことは内密に願うぞ。陛下の準備ができるまでは、どこぞのバカがエリクサーを飲んで野心を起こさぬとに限らん」

「ふふ。すべての兵士があなたのように忠誠心が高ければよいのですがね」

ムーザッパはこの幸運に感謝した。見張りの兵がいたら、こんなに重要な情報を彼らが話すことはなかっただろう。思い出してみれば、命に関わる仕事をこなしてきたときには、いつもこんな幸運に恵まれていた気がする。

その時、遅れてやってきた見張り兵が到着し、騎士隊長の姿を見て慌てて敬礼した。魔道士は激しく彼らを叱咤する騎士隊長に向かって微笑みながら別れを告げた。

「それでは私はこの辺で」

「おお、ご苦労だった。また明日な」

ムーザッパはこれからの行動を変更することにする。エリクサーは、魔道実験室ではなく、このフーゲルという名の魔道士が保管しているのだという。

ここに忍び込むチャンスは逃してしまったが、その前にエリクサーのありかを探るのも有益だ。

ムーザッパはフーゲルを尾行し、彼の自宅である塔に着いた。彼が塔の中に入ろうとした瞬間、ムーザッパは飛び掛り玄関から押し入った。

「な、何だお前は！」

ムーザッパは無言を言わず彼のボディに重い拳を叩きこみ彼を気絶させた。らしからぬ大胆かつ乱暴な行動にムーザッパ自身驚いた。すかさず彼は床を探つて地下への入り口を探す。絨毯の下にそれはあった。

鉄の梯子を降りるとそこは予想どおり、器具や薬品が並べられた実験室だった。ムーザッパはただ一つの目的のもの、エリクサーを探し始める。

「これ……だな」

他の薬品と同じように並べられているが、間違いない。そのガラス容器と液体の輝きはまさしく以前にルタオンに見せてもらったエリクサーのものだった。甲冑戦士が飲んだからか、少し減っているようだ。

……ここでエリクサーの分析をしているのか。だが、俺が見つけたからには……。

ムーザッパにはひとつの企みがあった。エリクサーをタイラン軍の人間に飲ませるわけにはいかないという名目の他に、もう一つ。これである憎き甲冑戦士と互角に戦う力が手に入る、という。

興奮で手が震える。しかし彼は蓋を開け、思い切って中身を一口飲みこんだ。数秒間は何も起こらない。だが。

ぶわっ。

ムーザッパの体の中からそんな音が聞こえたような気がした。体中が火照り、すべての筋肉が脈動する。はじめムーザッパはその現象に耐えられず倒れこんだが、やがて慣れてくるにつれそれが快感

となった。

そしてそれらが収まった時にはムーザッパは自分が生まれ変わったことを悟った。地下室の石壁に向かってパンチをする。壁が奥にめりこんだ。

これなら、勝てる。あいつに。もはや計略などいらぬ。

ムーザッパは塔を出ると再び魔道研究所に向かう。実験室を守っていた一般兵や魔道士の攻撃などムーザッパはまったく意にも介す必要も無い。ひと殴りすれば敵はあっさり倒れてしまう。ムーザッパは片っ端から怪しい部屋を調べまわった。

やがて彼はついに目的の部屋へ到着する。ドアにはカギがかかっていたがそれは力づくで破壊する。その部屋には二つのベッドが置かれていた。といっても休眠をとるためのものではなく、あくまで魔道の人体実験をするための台だ。

いた……！

そこにはムーザッパの愛するウェアリン王国王女エレンと、彼女のパートナー、勇者アルゴが目を開けて横たわっていた。二人ともベッドに括り付けられた金属のわっかに手足を拘束されている。

ムーザッパはエレンに近づく。金属のわっかを力づくでねじ切ろうとしたがそれはうまくいかなかった。魔法的な力が働いているのかもしれない。しかし、ベッドの横に付けられたボタンを押すとそれはあっさりはずれる。ムーザッパはエレンを抱き起こし軽く揺すった。

エレンはうめき、ゆるゆると目を覚ます。一瞬彼女は警戒の為に体を固くしたが、ムーザッパのことをかすかに覚えていたのか眉をひそめた。

「あなたは……？」

「エレン様、私はウェアリン国のムーザッパという者です。あなたを助けにきた者です」

「ああ」

エレンは思い出した。そうだ、あの時私を助けようとした人……。

「早くここから逃げ出しましょう」

ムーザッパはエレンと同様にアルゴの拘束もはずし、3人の脱出の準備が整った。勇者ふたりは体に力が入らなくて少しふらふらしているようだった。

その時、部屋に黒い甲冑戦士が入ってきた。

「貴様か！ 侵入者というのは！ むっ」

甲冑戦士は勇者達が拘束を解かれているのを見て短くうなった。

「なめた真似をしおって……死ねっ！！」

甲冑戦士はムーザッパに殴りかかる。ムーザッパは力を込めた腕でそれを何とか受けとめた。

「な……まさか、貴様！」

「お前と同じだ！ 俺もエリクサーを飲んだんだ」
「くそっ」

「お前らの好きにさせるものか。精霊戦士を誕生などさせないぞ」

「何……！？ くくく、ははは」

「何がおかしい！」

「馬鹿め。勇者らが眠っている間にとくに精霊の力は抽出させて

もらっているわ！」

「何だと！」

「もう、精霊戦士は誕生している。あとは目覚めを待つばかりよ。
ハハハ…」

まるでその笑い声が合図だったかのように部屋の下のほうから大きな咆哮が聞こえた。甲冑戦士は笑いながら部屋の奥のドアを開けた。そこは下に降りる階段だった。そして今その階段を上ってくる足音が響いてきた。一步ごとに小さな地震が起きている。

「聞いたか、今の声を。そして今階段を上ってくる音を。真の精霊戦士第1号、タイラン国王アルベル陛下が参られるぞ！」

「そんな！」

「王自ら精霊戦士になったというのか！」

勇者二人はムーザッパ以上に動揺していた。

「逃げるぞ、みんな！」

アルゴが声を掛けるが、彼はあっさりと甲冑戦士につかまって、転ばされてしまった。

「ふふふ…：あなたがた勇者は精霊の力を抽出された影響でまだ体の自由が利かないはず。私の敵ではありません」

「だが、俺がいる…！」

ムーザッパは今こそ自分が勇者になるときだと感じた。

「逃げて下さい！ 私はここでこいつを食い止め…！」

ムーザッパはみなまで言うことができなかった。動物的本能が根源的な恐怖を感じた。すべての四大元素の精霊の力を手に入れた真の精霊戦士、タイラン王が登場した。その背格好は大柄な人間とさして変わらない。だが、ある程度武術に長けたものなら彼から発せられるオーラがただ者ではないことは判る。

まるで魔物だ。

「おお、陛下！！ ついに力を手に入れられたのですね！ さあ、その力をさっそくお示し下さい！」

タイラン王はニヤリと笑うとその甲冑のエリクサー戦士の腕をぐいと掴んだ。鈍い音を立て、手甲ごとその腕がつぶれた。

「う、うわわーっ、陛下、な、何を！」

叫ぶ甲冑戦士の頭上からタイラン王は腕をぶんと振り下ろした。ぽん、と甲冑戦士の首がもげ、下に落ちた。エレンが押し殺した悲鳴を上げる。タイラン王は人の心を失っていた。自分の力を試したくてしょうがない様子だ。もはや彼にとって人間は虫けらのような存在にしか見えなかった。

「真の精霊戦士の力がこれほどまでとは！ これは、これは……！」

絶望的な思いにとらわれつつもアルゴはふらつく体に必死で気力をこめ、精霊の力を開放しはじめた。エレンも同様にする。

「ふふふ……勇者の力……余に見せてもらおうか」

二人の体が光りだすがタイラン王は余裕の笑みを浮かべる。勇者

の力が最大になるのを敢えて待っているのだ。

タイラン王は彼らを攻撃しない代わり、天井に向かって手のひらからまばゆく輝く光線を放った。

ズン、と音がしたかと思うと天井にきれいな穴があき、そこから太陽の光が差込んでタイラン王を照らす。その間にあった障壁はすべて消滅したらしい。タイラン王の力のパフォーマンスだった。彼は気味の悪い微笑を見せた。

そしてアルゴとエレンの精霊パワーが最大になった時だった。

タイラン王の目が細められた。

彼の指先から虹色の光線が発せられアルゴの体を貫いた。アルゴは死んだ。

再びタイラン王はエレンに向かって同じ光線を発した。咄嗟にムーザッパは彼女を庇ったが全く無駄な行為だった。ムーザッパを貫いた光でも、エレンを殺傷するのに充分な力があつた。ムーザッパは死んだ。エレンも死んだ。

アミザール人の秘密

ムーザッパは跳ね起きると自分の体をまさぐった。傷は……どこにもない。

夢にしては異常に生々しい実感を伴っていた。汗はびっしょり、体がかくかくと震えている。まさか自分が死ぬ夢をみることになるうとは思わなかった。

本当に夢だったのか。そうだろう。自分は生きているのだから。だが……。

ムーザッパは周りを見回す。ここは技師ミューラスの隠れ家だ。飛行船で連れてこられた後、ここを拠点として泊めてもらっていたのだ。キースの文書解読に何も協力できないムーザッパはやる気持ちを押さえ、その力が必要とされる時に備えてルタミナと剣の稽古などをしていた。

ムーザッパは夢のせいで込み上げる吐き気を押さえ、藁葺きのベッドを整えなおして部屋を出る。隠れ家をうろうろしていると、奥の部屋でミューラスが飛行船のメンテナンスを行っているとところに行き当たる。

「よお、ムーザッパくん、おはよう。早いな」

「あ、おはようございます。ミューラスさん」

「どうした？ 顔色が悪いようだ……」

「いえ。大丈夫です」

「そうか？」

ムーザッパは夢の内容を思い出した。そうだ、俺の夢の中ではこれがミューラスさんとの最後の会話になったんだ。それからこっそり一人でタイラン王国に向かって、そして魔道実験室であんなことに……。

「どうかしたか？」

「あ、いえ、キースはどこかなって」

まだ胸がモヤモヤしていた。

「ああ、あいつなら、その洞穴で寝ているんじゃないか？」

ムーザッパは適当に発した自分の言葉に従ってキースに会いにくくことにする。キースはその洞窟内で寝そべっていた。そのそばにはアミザール探索のレポートを記した紙が並べられている。巨大なドラゴンが人間用のサイズに作られた書類を眺めるというのも奇妙な光景ではあったが、キースは器用にその紙を扱っていた。

「やあ、ムーザッパ。おはよ」

「おはよう。キース。何か判ったか？」

「ごめん、まだ駄目だよ。どうやら空間転移の呪文のことについて書かれているらしいんだけど、なぜかそれを発動させることができないんだ」

「空間転移？ それってあの黒の甲冑の男が使っていたあれみたいなもんか？」

「あれぐらいの呪文ならサクラ様や僕でも使えるんだけどね。あらかじめ特定の場所に自分専用の魔法陣を書いておいて呪文を唱えるところの場所に戻るってタイプの奴。あれは中級魔法なんだ。それとは違うと思う。これはもっと、何とか言うか精神を飛ばすというか……」

「キース、俺は魔法のことは全然わからないんだけどさ、呪文って書いてある通りに覚えて唱えただけじゃ駄目なのか？」

「ああ、それはね、術者の魔力が関係するんだ。強力な魔法を唱えるためには自身の絶対魔力を高めておかないといくら頑張っても発

動しないんだ。いい？　ちょっと唱えてみるよ？」

そういつてキースは身振りを付けて呪文を唱えた。だが、キースのまわりの空間が揺らいだように見えただけでそれ以上何も起こる気配はない。

ムーザッパはその呪文の響きに何かひっかかるものを感じたが、それが何か思い出せないので黙っていた。

「あー、今の呪文がうまくいかなかったのはキースの魔力が低いってことか？」

「……これでも僕はドラゴンの端くれだよ。単に魔力だけならサクラ様……ほとんどの人間を上回っているんだ。それでもうまくいかないってことはこの呪文を唱えることができるのは上位魔族かあるいは……あつ、そうか」

「アミザールの人間、つまりエリクサーを飲んだ人間だ！」

「……でも、それじゃどうしようもないよ。上位魔族はみんなアルゴ様やエレン様に討たれたし、第一、いたとしても僕たちに協力なんてしてくれない。そしてエリクサーの方はと言えば敵の手中にあるし……ああ、謎が解けると思ったのに！」

「キース。……俺、さ、エリクサーのある場所、知ってるよ」

「えっ!？」

タイランへ向かう飛行船の中でムーザッパはずっと無言だった。何故エリクサーの有り場所を知っているのか尋ねたられたが、答える訳にはいかなかった。ルタミナも、彼が質問を拒絶する雰囲気な躊躇ったのか話しかけてはこなかった。

ムーザッパは自分でもおかしいと思っている。あれは夢でしかない。けれど、本当のことだ。彼には確信があった。

簡単に強くなれる方法なんてものが身近にあったら、誰だって試してみたいくなる。

エリクサーを飲んだ俺と、精霊戦士になったタイラン王。そろえられた材料が異なるだけで、俺達は何ら変わるところがなかった。強くなったらその力で弱いものを叩いて悦にひたる。俺もその気持ちには判る。判ってしまった。いくらエレン様を救うためという名目があるとは言え、俺が夢の中でタイラン兵にやってきたことはまさしくそれだった。

恐ろしい。ムーザッパは身震いする。

勇者アルゴとエレン様はどうだったんだろう？ 魔大戦終了後、アルゴは姿を隠し、エレン様はしとやかな女性に変わった。それはタイラン王から逃れるためだけではない。自分の力が不和のもとになることが怖かったからだ。ふたりは懸命に自制してきていたんだ。やっぱり、ふたりはそういう意味でも勇者なんだ。

勇者だけに限らない……みんな同じような思いで姿を隠したんだろう。ルタオン……ルタオンはどうだったんだろう。エリクサーを隠すという重要な役目を引き受けたとき、どんな思いだったんだろう。災いのもとになるアイテムなど、捨ててしまいたかったのだろうか。けれど、あれほどの宝物だ。いつか役に立つときがくると思って遺跡に隠していたんだ。それを愛する人のために使われようとしたけれど、結局あんなことになって。

ムーザッパはそこであることを思い出した。

やがて飛行船からタイラン国の首都が見えてきたので、少し離れた人目の付かない場所に着陸させてそこから徒歩で町へと向かった。

予想していた通り、タイランの都の光景は夢で見たままだった。彼はルタミナをうながすと先導して魔道士フーゲルの塔へ向かう。

キースに作ってもらった使い捨ての魔法の鍵で塔の中に入ると夢の中と同じように地下室へと向かった。

「ねえ、ムーザッパ、いいかげんにしてよ。そろそろ、何でここに来たのか教えてよ」

ムーザッパはそれを無視し、室内の、やはり夢の通りの場所にあったエリクサーの入ったガラス瓶を手にとった。

「ルタミナ……お前もこれがエリクサーだと思うよな」
「え」

ルタミナはそれを受け取り、まばたきして、それを確認する。

「うん、そうね……。そっくりだと思うわ」

「飲め」

「えっ！」

「飲んでくれ。一口でいいんだ」

「ちよっと……何で私が」

ルタミナは文句を言おうとしたがムーザッパの奇妙な威圧感にのまれてしまう。幼馴染がこんな強引なことをするなんて信じられなかった。手の上に垂らし確認しながら舐めるように飲み込んだ。

「……で？　どうなる……きゃあっ！！」

彼女に強烈な作用が襲いかかる。ムーザッパが夢の中で体験した通りの事態になった。

「あ、あ、あ、す、すごい。力が、力があふれてくる！　これが、

これがエリクサーの効果なの！ 凄い。これ、ホントに凄いわよ。
ほら、ムーザッパも。これでエレン様を助けに行くことが出来るわ
よ」

ルタミナは目を輝かせるが、ムーザッパは険しい顔のままだ。

「駄目だ」

「えっ！？ でも、これ」

「それでも駄目なんだ。真の精霊戦士の力は今のルタミナ、いや、
エレン様達勇者とあわせて束になっても敵わないんだ」

「どうしてそんなことが分かるのよ？ とういか、それじゃどうし
て飲ませたりしたのよ？」

「キースの魔法を試してみよう」

納得のいかないルタミナを連れて塔を出、ムーザッパは飛行船の
場所まで戻っていった。

「僕の解読したところによると、これはどこか特別な場所へ行く呪
文らしい。文脈からするとアミザール人はこの場所に行くことこそ
最終目的だ、とか書いてある。この場所では心の力ですべての願い
はかない、永遠の安らぎを得るとか……」

キースの説明にルタミナは眉をしかめる。

「めっちゃくちゃ怪しいじゃないの。ムーザッパ、それで、呪文を唱
えたら何が起こるの？」

「わからない」

「ええっ？ ちょっと、ムーザッパ、今更それはないでしょ！」

「わからないものはしょうがないだろ。ただ……気になることがあ
ったんだ」

「何よ」

「ルタミナ……いいか、お前にはつらい事かもしれないが、ルタオンが死ぬ直前のことを思い出してくれ」

「……？」

「あのときルタオンは何か訳のわからない言葉を叫んで手足をばたばたさせただろ？ 俺はあれを死の間際のうわごとだと思った。だけど、そうじゃなかった。キースの呪文を聞いて思い出したんだ。ルタオンが口にしたのはまさしくその呪文だったんだよ」

「呪文！？ ……そんな、まさか」

「ルタオンはおそらくアミザールの秘密をすでにいくつか解読していたんだと思う。だから死ぬ前に何かを試そうと思って魔法を使っただ。けれど魔法は発動しなかった。でも今のルタミナならできる。エリクサーを飲んで体力と魔力を飛躍的に増大させたルタミナならできる。ルタオンが何をしようとしていたのか、妹のお前の目で確かめるんだ」

「……」

ムーザッパはルタミナにエリクサーを飲ませた理由をそうごまかしたが、エリクサーを飲んだ夢の自分が恐ろしかったからでもあった。

「ミューラスさん、俺と一緒に呪文の効果を見届けて下さい」

「ああ。わかった」

「それじゃ、いくぞ、ルタミナ」

「うん」

ルタミナはキースに教えられた通りに呪文詠唱のポーズをとりながら、その言葉を発する。

ミューラスは彼女の様子がおかしいことに気がついた。呪文を唱え終わったルタミナはぴくりとも動かない。

「おい、どうしたんだ？ あっ！！」

ミューラスはルタミナの体に触れぎよつとした。冷たくなっている。

「ちょ、まさか、死んでいるのか？ おい、おい！？」

ムーザッパも駆け寄った。しかしルタミナには何の反応もなかった。

……。

……。

……。

………眩しい。

ルタミナは思った。眩しくて目を開けることができない。

でも、なんて心地いいんだろう……。

自分を眩しい光が包んでいる。その光は優しくルタミナの全身を温めていた。いつまでもここにいたい。そして至福の時を味わい続けたい……。

「ルタミナ、ルタミナ！」

自分と呼ぶ声がする。誰だろう？ 誰かに腕を掴まれた。ああ、たぶんムーザッパだ。そう言えば何で私ここにいるんだっけ。ムーザッパ、引っ張らないで。こうしているのが気持ちいいんだから。

「おい、しっかりしろ、ルタミナ」

ルタミナは目をつぶったまま、自分に呼びかける声を聞いた。

「ルタミナ。ほら、起きろ」

「うう……ん」

聞きなれた大好きな人の声。ムーザッパじゃない。その声の主は……！

「ルタミナ！」

「お兄ちゃん！？」

ルタミナはぱちりと目を開け、そしていきなり起きあがったため、思い切り彼の顔に頭突きをくらわせてしまった。

「お兄ちゃん……！」

夢ではなかった。そこには彼女の兄が痛そうな顔をしつつも自分を見つめていた。彼の背後に数人の見なれない民族衣装をきた人々が立っていた。

辺りを見回す。青い空と緑の自然に囲まれた美しい場所だった。その中に、ここには不自然なものとして黄金色の太い光の柱があった。ルタミナはそれがさっきまで自分のいた場所だとわかった。

「頭、ハッキリしてきたか？」

「ホントに、ホントにお兄ちゃんなの！？」

ルタオンは優しげに頷いた。

「お前も、ここに来てしまったのか」

「ここはどこなの!？」

「ここはエデン。アミザールの人達の住む世界だ」

……。

「俺はタイラン国でみんなと別れた後、伝説の霊薬を飲んでみたいという誘惑に負けて、約束を破って少しだけエリクサーを飲んでしまったんだ」

草原の上に腰掛けてルタオンは説明する。ルタミナの手には先ほどいたアミザール人女性から手渡された果実があった。

「あの呪文がこのエデンへ通じる魔法だということはおおそ予想がついていた。だから敵を油断させる意味でもあの時に死んだフリをして魔法を試してみようと思ったんだ」

「そうだったんだ……でも何故そんなことをしたの？」

「俺、ポールに刺されたとき思ったんだよ。偽りの愛情を一年間も演技して、最後に裏切る。こんなことまでして人間は力を欲しがるのかってね。もの凄く悲しくなったんだ。あの時は本当に死にたいという気持ちも少しはあったかもな。まあ、それでようやく本気でエリクサーを破棄する気になったんだよ。そしてエリクサーを発明したアミザール文明に逆にならエリクサーの効果を打ち消すものがあるんじゃないかって推測したんだ」

ルタミナは口の中の果実をぐくりと飲みこんだ。

「それで?その方法は見つかったの?」

「ああ、訳なくね。でも」

「でも?」

「ちょっと、ついてきてくれるか？」

ルタオンは立ちあがった。すると近くにいたアミザール人男性が声を掛けてきた。

「ルタオン、ゲートに行くのか？それじゃ、案内するよ」

「ありがとう」

「ねえ、お兄ちゃん、アミザールの人達って皆親切なのね」

ルタミナが兄に囁く。

「まあな、俺達が珍しいんだ。永遠の命を持つ彼らにとって、いいひまつぶしだから」

ルタオン達を案内してくれた男は歩きながら楽しげにアミザールの歴史について解説し始めた。知らない人に説明するという行為が大変好きらしい。

「はるか大昔、人々の祖先は自らを生み出した神と共に皆このエデンに住んでいたのです。平和な日々が長く続きました。

しかしある日、どこからともなくこのエデンに一匹のドラゴンが現われ『禁忌の実』を食べてみよと言ったのです。人々はそれは神から猛毒の実であると教えられていたので一旦は断りました。しかしドラゴンは自らその実を食べ、これを食べると知恵がつくのだと誘惑しました。人々はそれをみてついに『禁忌の実』を口にしました。ドラゴンの言ったことは本当でした。しかしこのことはすぐに神にばれ、人々はエデンから追放されることとなったのです。

神の怒りをおそれた人々はおとなくそれに従いましたが知恵をつけた人々は神の心境も見透かしていました。神は人々を、自分の言うことを聞く可愛いペット、ぐらいにしか思っていなかったので

す。自分が『禁忌の実』は毒であると嘘をついたことは棚に上げ、自分の思いどおりにならないペットならもういらぬ、と地上に捨てたのです。

地上はエデンと違って厳しい環境の世界でした。何人かの人間は後悔し、神に謝罪してエデンへ戻ろうとしました。しかしその他の人間は知恵を働かせて地上で生き延びる努力をしました。中でもアミザールの始祖達はいつかこの知恵を用いて自らエデンへの道を切り開こう、と誓ったのです。

他の民族がだんだんエデンのことを忘れて行く中でアミザール人だけは研究を続けました。そしてついにエデンの『生命の実』と酷似した成分を持つエリクサーを発明したのです。そして『神の言葉』を利用した魔法の呪文も開発し、すべての準備を整えて我々はここエデンに帰ってきたのです。地上では我々のぬけがらの肉体が残され、突然の滅亡と呼ばれていたようですがね」

「肉体が……残された？ それじゃ、この、体は？」

ルタミナが質問した。

「精神体を作り出したもので、絶対的なものではありません。すべてあなたのイメージで作り上げたものです」

「それじゃ、念ずれば姿は変化するのですか？」

「やってできないことはありませんが……、そんなことをしたら自我崩壊を起こしてしまいますよ。自分固有の体をつくりあげるのがこの世界での第一のアイデンティティなのですから」

「?？」

自我崩壊とかアイデンティティとかよくわからない言葉が出てきたので彼女は黙った。要するに好奇心で変なことはしないほうがいいということだろう。

「ああ、着きましたよ」

男は言った。

「ありがとう」

ルタオンは手を上げて感謝の意を告げた。

「そこを見てくれ」

ルタオンが指し示すそこにはルタミナが現れた金色の光の柱とは対照的な青白い光の柱であった。

「この光がエリクサーの効果을打ち消す力を持っているんだ」

「これが……」

ルタミナはその光の柱を眺め回す。青色は美しくもあったがどことなく不安を煽るような感じもした。

「ここはこのエデンから地上世界へ戻るための出口だ。この光の中に身を浸せば来たときとは逆に、元の体に戻ることが出来る。しかしその時、俺達の体からエリクサーの効力が消え去ってしまい、もう一度エリクサーを飲んだとしても二度と力を得ることは出来なくなるんだ」

アミザール人男性が説明する。

「私達は永遠の命を得ることができましたが、中には限りある命の中で人生を楽しみたいと言う者もあらわれました。ここはそういういた者たちが利用した場所です」

「この光を利用すれば、エリクサーはその力を失う」

ルタオンはその光の柱に向かって呪文をつぶやいた。すると光の柱から青い小石がぽこぽこと飛び出した。ルタオンはそれらを拾い上げた。

「お前が来てくれたのは有難かった。これは光を結晶化したものだ。これを地上世界に持って行って使うといいだろう」

「いいだろう……って、お兄ちゃんは？」

「俺は……俺は帰るべき肉体がないだろう。海の底でお魚のエサさ」
「あっ」

ルタミナは口を押さえ、悲しそうな目をした。

「お兄ちゃん、私……」

「泣くな。俺は死んでない。それよりも今は奴らの野望を阻止するのが先決だ」

「う、うん……」

「さあ、行け」

光の柱に触れる前にルタミナはもう一度振りかえった。

青白い光の中に入った瞬間ルタミナはぞくりと悪寒に襲われた。気持ち悪い。ぎゅっと目をつむり、自分の体を抱きしめる。来るときとは大違いだ。全身をめぐる苦痛に彼女はひたすら耐えるしかなかった。

部屋に突如うめき声が響いた。

「はあっ、はあっ、はあっ……ううっ、うええっ……」

「おおっ！ 生き返ったか、ルタミナちゃん！！」

ミューラスが苦しがるルタミナ駆けよって彼女を抱きかかえた。
ムーザッパが水の入ったコップを持ってきてルタミナに飲ませる。
なぜか彼の顔には青あざがついていた。

ルタミナは自分の体が普通の人間のものに戻ってしまったことに
半分がっかりし、半分嬉しく思った。握り締めた拳の中にはいっ
ぱいにルタオンの贈り物が青く光っていた。

誕生

そして彼らは再びタイランの都へやってきた。

ムーザッパは魔道士のローブを着こみ、うつむき加減に魔道研究所の入り口へとやってきた。

「待て。通行証を提示せよ」

見張りの兵士に要求され、彼はローブの内ポケットからそれを取り出した。

「よし、通つてよろしい」

それはかつてサクラの使用していたものだった。ムーザッパは他の研究所勤めの魔道士に比べて筋骨たくましかったが、おざなりな仕事をしている兵士はそれに注意を払わなかった。

ムーザッパは研究所に来るまでに飛行船の中で夢で見た通路を思い出し、勇者の囚われている部屋への最短ルートをシミュレートしていた。

ローブの下は傭兵スタイルだが、目立たぬように武器はショートソードにとどめてある。腰に巻きつけた小袋の中にはいつもの所持品の他にキースお手製の魔法のアイテム、そして勿論ルタミナからもらった青い石もいくつか入っている。作戦の要となる大事な石だ。

ここだ……。夢の通りだ。

ムーザッパはドアに手をかける。鍵がかかっていたが、幸いキースのつくった魔法の鍵で開く程度の防御システムだった。部屋の中

に入り、ムーザッパはローブを脱ぎ捨てる。

「姫様……」

エレンの拘束を解き、そっと呼びかけるが彼女はまだ眠っている。ムーザッパは彼女の身体を揺するうとして、その時ちよっただけ魔が刺し、彼女の唇に指を押し当て横にこすった。びくっと震えたエレンにムーザッパは慌てて指を離す。

「ん……あなたは……？」

「エレン様。私はウェアリン国城下町に住むムーザッパという者です。姫様を助けに参りました」

「あ、ああ、あなた、思い出したわ。あのときの……」

「エレン様。これをお飲み下さい。魔法の回復薬です」

エレンにキースの回復魔法がかけられた薬を渡すと、ムーザッパは勇者アルゴの拘束を解きにいった。

「お二人の体調が戻ったらここを脱出しましょう」

二人はうなずく。

その時どかどかと騒がしい音がして部屋にやってくる者があった。黒の甲冑戦士だ。予想された出現だ。

「この部屋には限られた者しか出入りできぬず……！？」

甲冑戦士は勇者達の拘束が解かれているのを見て目を見張った。

「貴様……！ 何者だ！ スパイか！？」

甲冑戦士は戦闘態勢をとる。それに敏感にアルゴも反応する。しかしムーザッパはここぞとばかりに決めようと、二人の間に立ちはだかった。

「アルゴ様。手出しは無用です。ここは私ひとりで充分です」

「思い出したぞ。貴様、エリウム洞窟に来ていた奴だな。生きて帰ってこれたのか！　だが」

「そりゃあっ！！」

ムーザッパは甲冑戦士に青い小石を投げつけた。それは砕け散り、青白い光線を発して彼を包んだ。

「何だ、これは？　うっ、うぐっ！　なんだ、貴様何をした！」

効果は靦面に表れた。甲冑戦士は激しい悪寒に襲われ苦しんでいる。

「おのれえい！　小癩な！」

甲冑戦士はムーザッパに殴りかかった。ムーザッパは構えた腕でそれを何とか受けとめた。本来なら腕がふっとんでいたところだ。

「な、何だと！　まさか！」

ムーザッパは甲冑戦士に斬りかかる。

「あんたも気づいているんだろう？　あんたの中のエリクサーの効果はもう消えているんだ」

「何っ！　むっ、今の青い光のせいか！」

ムーザッパの剣をかわしながら彼は叫ぶ。こうなっては武器を持つていない自分が不利だ。

「そのとおり。そして今度はこの石をタイラン王に使う！ 精霊戦士は誕生させない！」

「なっ。貴様何故陛下が精霊戦士になることを知っている！？」

「何ですって！」

「王自ら精霊戦士になったというのか！」

その時、まるでその声に返事をするかのように部屋の下の方から大きな咆哮が聞こえた。

驚く彼らの隙をみて甲冑戦士はどんとムーザッパに体当たりしてよろけさせると部屋の奥のドアを開け、下に続く階段を駆け下りていった。

「あっ」

だが次の瞬間、勇者アルゴと勇者エレンは敏感に危機を察知し、部屋の床を見ながら飛びのいた。

すさまじい音とともに床の石が跳ね上がり怪物が現れた。

精霊戦士は階段を登らず、直接天井を突き破ってこの部屋にやってきたのだ。

「タイラン王……本当に精霊戦士になってしまったのね」

エレンがつぶやく。彼女の顔は彼のパワーにおびえて青ざめていた。タイラン王は自分の体のほこりを落とすと3人を見て邪悪な笑みを浮かべる。

よし、今だ！

ムーザッパは青い石を投げつけようとした。だが。タイラン王はその様子に目をやると、すっ、と手首を軽く横に振った。一瞬の出来事だった。三日月型の光の塊がムーザッパの手に向かって飛んできた。

ムーザッパの手首から上がすっぱりと切り落とされ、握り締めていた小石は一緒に床に落ちて転がった。

「うわーっ!!」

ムーザッパは思わず叫んだ。失敗したことに対する悔恨より何より自分の手が無くなるという状況に驚かずにいられない。

「何という力だ。これでは逃げる隙すらなさそうだ」

アルゴは絶好調時の自分でもこの怪物の何分の一の力もないことを悟った。それでも懸命に精神を集中し、精霊の力を解放しようとした。エレンも同様のことをした。

これは……この状況は！

ムーザッパは目を見開いた。

頼む！ 俺の夢。あれは予知夢だったんだろ？ タイラン王……俺の夢で見たとおりの行動をしてくれ……。もしはずれたら……。

ムーザッパは万が一の場合に備え、床に落ちた青の石を見やった。

「ふふふ……勇者の力、余に見せてもらおうか」

タイラン王は手のひらを真上に向け、天井に向かって光線を放った。

「やった！」

ムーザッパは思わず叫んだ。なぜなら、次の瞬間、天井に空いた穴からは普通の太陽光線ではなく青い光が流れ込んできたのだから。

「ぐわわあああー！ー！ー！！」

照らされたタイラン王の大絶叫がこだました。

タイラン王からエリクサーの効力が消えてゆく……。それはすなわち精霊の力に耐えられない普通の人間の肉体に戻るということだった。

肉眼でもはっきり見えた。暴走する精霊の力がタイラン王の肉体を破壊していく様を……。

ミューラスとルタミナは飛行船に乗って上空で待機していた。それはムーザッパと打ち合わせていたことだった。

もし自分が失敗して、精霊戦士が魔道研究所から出てきたなら青の石の光線を浴びせてやれと。

そのためにミューラスは青の石をセットした光線砲を急仕立てで開発したのだった。

ミューラスは機転を利かせ、タイラン王が自らあけた穴から光線を放射したのである。

タイラン王の絶叫は飛行船までも震わせた。

ミューラスとルタミナは顔を見合わせると互いに笑みを浮かべた。

「やったようだな」

「やったわ！」

ルタミナとミューラスはがっちりと握手する。

やがて研究所から3人の姿が現われるのを見つけた飛行船はゆっくりと下降していった。

花火（前書き）

これにて最終回です。ありがとうございました。

花火

エレンが父王にタイランでの事を報告したため、すぐさまウェアリン王はタイランの大使を監禁し調査団が糾弾のためにタイラン国へと飛んだ。タイラン国の抵抗はほとんどなかった。タイラン国のホノイ王太子は臆病で争いを好まない青年であり、また同時に魔道研究所における所業についても知っていた。できるだけ穏便に、タイランの全面謝罪という形で事件は収められた。

研究所の一室ではサクラの遺体が発見された。キースはその死体を連れてどこかへと行方をくらませてしまった。悲しみがやわらぐまで待とう、ということでは皆は合意した。

そして数日後。エレン姫誕生祝いおよび王国復興記念パーティーがやりなおされる日となった。

ムーザッパとルタミナは着慣れない服装でウェアリン城へ向かった。

あの日切り落とされたムーザッパの手は元に戻っている。勇者エレンの魔法により、不自由なく動かせるようにくつつけられた。思い出にするために、わざとつなぎ目の傷跡を残してもらった。

王女が無事に帰還したこと、起こり得た戦争を回避できたことにより、人々は更に喜んでパーティーを楽しんだ。

「よお、お二人さん！　これから舞踏会かい？」

「あつ、ミューラスさん」

二人は城内で行われるパーティーの夜の部の舞踏会に向かうところだった。一定の身分ではないと出席できないものであったが、ムーザッパもルタミナも今回の功績で称号を与えられることが内定し

ており、彼らにも招待状が届いていた。

「あれ？ミューラスさんは行かないんですか？」

ミューラスの格好を見てムーザッパは尋ねた。

「ああ、ああいうのは俺の柄じゃないんでね。辞退させてもらったよ」

「行かないんですか……」

ルタミナはがっかりとした表情を見せる。

「まあまあ、ルタミナちゃん。そのかわり俺はちょっとした趣向を用意したから」

「え？趣向って？」

「それは舞踏会場でのお楽しみ」

ミューラスはウィンクした。

しかしムーザッパとルタミナは舞踏会で肩身の狭い思いをする。最初の頃こそ、エレンやアルゴがそばにいてくれたので、救国の立役者としてのもの珍しげに他の貴族たちも話しかけてきたが、やがて親交の深いもの同士だけの話になり、貴族の優雅な踊りも知らずムーザッパたちは二人でご馳走をつまむだけになった。

「どうしよう、もう帰ろうか」

「ううん、一度エレン様に挨拶して……！」

「あっ……！」

ルタミナはエレンの姿に気づく。彼女はアルゴに連れられてテラスへと向かっていった。急いたようにムーザッパをつつき、二人でそちらへと早足で向かう。

ドーン、という大きな音が聞こえ、二人だけでなく会場の人々が同時に驚いて身体をすくめ辺りを見回すが、窓の外にその理由があった。それは色鮮やかな花火の音だったのだ。戦時中には出来なかった、火薬を使った娯楽だった。

「エレン、俺、今こそ言うよ。結婚しよう」

ウェアリン城のテラスで男女が二人……いや、テラスの先端に男女が一組、そしてテラスの入り口付近にこっそりと隠れて様子を伺っている男女が一組あった。

このテラスからだと、打ち上げられる花火がよく見えてとてもいい眺めだ。だが、いまそれに注目しているのはエレンだけだ。

エレンにプロポーズしたアルゴは緊張して彼女のリアクションにばかり注意を払い、その二人の様子を伺っているルタミナとムーザッパも同様に花火どころではなかった。

エレンは花火を眺めたまま、アルゴに答える。

「アルゴ、私、その言葉をずっと待っていた。今あなたにそう言われて凄く嬉しい」

「エレン！」

だが、アルゴの言葉を遮って彼女は続けた。

「でも、でもね！ 待って、アルゴ。私は、私はその言葉をもっと早く言って欲しかった。決着が付く前に言って欲しかった」

「エレン、でもそれは……」

「判ってる。サクラとの約束だものね。判ってる。でも私は女の子

なの。王女なの。エレンなの。わがままでどうしようもない私なの。たとえどんなことがあっても側にいてほしい、私を見つめて欲しい、私を護って欲しい、そう思っているのが私なの」

「……」

「ねえ、アルゴ、私今度の事件でびっくりした……、ううん、感動すらしたことがあるの。私を助けてくれた彼……あのムーザッパっていう男の子」

不意に自分の名前が口にされたのでムーザッパはカッと顔に血を上らせた。

「彼は私があのだイラン国の騎士隊長にやられた時、敵わないとわかってるのに助けにきてくれたの。エリアム洞窟でも、魔道実験室でも、彼は危険を顧みないで私を助けにきてくれたの」

「彼に惹かれているの？」

「それは……まだわからない。ただ、彼の私への気持ちが伝わってくるの。単に王家の人間に対する忠誠心っていうものではなくて。つまり……あの気持ち。本当、胸が痛くなるくらいに、ね。ねえ、アルゴ。あなたはそれぐらいの気持ちを私に向けてくれたかしら？」

エレンはくるとアルゴに振り向く。アルゴは咄嗟に言葉を返せない。その時エレンは視界の端に入った別のものを見て目を見開き、口元を押さえて顔を赤らめた。

「あ……ムーザッパ！」

「えっ!？」

アルゴもその声につられて後ろを向く。観察眼に優れた二人の勇者にとって隠れたつもののムーザッパの姿はあからさまだった。仕方なく、鼻の頭を掻きながらムーザッパは二人の前に姿を現して数

歩寄って行く。ルタミナは、一緒に行くのは間抜けだと思ったのでその場で立ち上がって三人の様子を見つめた。

「ムーザツパ、聞いていたのか、今の俺達の会話」

「ええ、まあ……」

「じゃあ、聞かせて欲しい。実際に君の口から聞かせて欲しい。君はエレンのことをどう思っているのか……」

ムーザツパは沈黙し、慎重に言葉を選ぼうと頭を回転させた。

「俺は、俺は……」

その時、ドーン、と花火が音を立て、色付きの光が当事者達を照らした。それに背中を押されたようにムーザツパは思い切ることにした。だが。

「ムーザツパ、危ない！ 後ろ！」

エレンが叫んだ。

ムーザツパはその声に、反射的に振り向いた。何もない。だが、次の瞬間ムーザツパの頭上を二人の勇者がものすごいスピードでジャンプしたので彼は慌てて伏せた。

アルゴはその空間のある地点を手で掴んだ。ちらりと空間の歪みが見えた。そこにエレンは手を差し入れると、力を込めて引っ張り戻した。

何も無いはずの空間から一人の人間が引きずり出される。その姿を見たムーザツパはあっ、と小さく声を上げた。それは道化師姿で仮面を被っており、いつぞやの夢に出てきた人物だった。

「お、俺の夢の中の人間が、本当にいた!？」

「あなた、何者!？ 亜空間を作りだして隠れているなんて、ただものじゃないわね!」

道化師はエレンに腕をねじり上げられる。

「花火が上がったとき、ムーザッパの周りだけ光の屈折率が違っていたから気づいたのよ」

「くっ、さすがは女王様。ちょっとした私の油断も逃さないとは」

「女王様？ 何、それ!？」

エレンは不愉快な顔をしてさらにきつくねじる。もちろん、痛いだけにとどめておく手加減はしている。

「さあ、おっしゃいな。あなた、ムーザッパの背後に忍びこんで何をしようとしたの？」

「……私は、タイラン王国王太子ホノイ様の部下です」

「ホノイ王子!？」

「あの方から命ぜられたのです。あの方はご幼少の頃からエレン様をお慕いしていました。しかしこの間、結婚を断られてたいそうお悲しみになられたのです。そして私は命ぜられました。エレン様に近づく男どもをすべて排除せよと……うぐっ」

エレンはさらにきつく男の腕を責めた。これ以上やっては脱臼してしまう。

「私にそんなウソが通用するとも思うの？ これでも私は勇者よ。素の状態で嘘を看破する能力は持つてるわ」

「わ、判りました。真実をお話します」

ようやくエレンは道化師を解放した。彼は腕を庇いながら話し出

した。

「私の名前はシオン、今から50年後の世界からやってきた者です」
「!?!」

彼の発言が突飛だったのでムーザッパもルタミナも目をしばたいた。だが、勇者ふたりは彼を睨み続けたまま話の先を促した。

「時間を超越する魔法は伝説に聞いていたことはあるけれど、本物の術者は見たこと無いわ。でも、あなたが嘘をついていないのは確かね」

「50年後の世界は一言で言って地獄です。地、水、火、風の4大元素の精霊の力をすべて兼ね備えた魔皇により、力による支配がまかりとおっている世界です。私はこの魔皇の存在を消し去るためにやってきました」

そこでアルゴが口を挟んだ。

「待て。それはタイラン王のことを言っているのか？ それなら」

「いいえ、私が言っているのは人工的に作られた精霊戦士ではありません。自然に生まれた精霊戦士なのです」

「自然に？」

「はい。じつに単純なことでした。魔皇の両親は、火と風の精霊の力を持つ者と水と地の精霊の力を持つもの……それは生まれながら四大元素の力を持つ精霊戦士だったのです。充分考えられることでした」

「まさか、それじゃ……その魔皇というのは……!?!」

「はい。この時代から間もない将来、あなた方勇者の間に生まれる子供のことです」

「そんな……」

「俺達は？俺達はもうしたんだ？我が子を止めようとはしなかったのか？」

「……全く、世界を救った心正しき勇者からなぜあのような悪魔が生まれたのか、信じられません。私もその当時は生まれていないのではっきりとしたことは判りませんが、魔皇は幼い頃から凶悪で残忍な性格だったそうです。王家の人間ということである程度は目こぼしされていたのですが、ある日魔皇は自分の力に気が付いてしまったのです。」

それは両親から行いを咎められた時、わずらわしい、と思って睨みつけた時でした。お二人の肉体は瞬時に粉みじんに吹き飛んだということです。これで魔皇は誰にも止められないことが証明されました。すなわち地獄の日々の始まりです。

私の父は魔皇の目を逃れつつ、この地獄を消し去る方法を考え出しました。魔皇の誕生以前まで時をさかのぼって受胎を阻止し、はじめからいなかったことにしよう、と。そしてついに先日父は時間を超える機械を発明し、片道分のエネルギーをかき集めて私を寄越したのです」

エレンは愕然とするが、道化師から嘘の気配が感じられなかった。

「しかし、まだ、判らないことがある。なぜムーザッパを狙った？狙うなら俺かエレンだろ？」

「いえ、私達の時代には魔皇どころか、あなたがたにかなう者すらいません。いえ、それ以前に世界に平和をもたらしてくれた勇者様達を手にかけるなどんでもないことです。ですからもっと平和的な手段を選びました。要するにあなた方勇者同士が結婚しなければよい。だから私は時間を超えるとき、あなた方の仲を邪魔する存在を持ってきたのです」

四人はほぼ同時に同じことを考える。だがそれを口にするのは恐

ろしく、誰も何も言わなかった。

「私が降り立ったのがこの時代から15年前です。その時私は籠に入れた赤ん坊——実際は魔法処置を施したホムンクルスですが——を最も信頼できる人物の家の前に置いておきました。私はその赤ん坊に継続してエレン姫だけを命がけで愛し彼女から愛される存在になれ、という命令を掛け続け、様子を見張っていました、しかし……」

「もう、もうやめてよ!!」

叫んだのはルタミナだった。彼は大股で道化師に近づくと泣きながら彼を見据え、彼の胸に指を突きつけて言った。

「そんなの! そんなのウソよ! 私は小さい頃から、物心つく前からムーザッパを知っている。ムーザッパはつくりものの人形なんかじゃない!」

「……だからですよ。私達の技術では人間そっくりの性格を入力するなんて不可能です。だから、こころ優しい人達の間で囲まれて人間らしい性格を自然に身につけるようにしたのです。そうでなければとてもエレン様に好かれるような人間にはなれませんから」

「うるさいっ!!」

ルタミナの平手打ちが飛んだ。乾いた音がして仮面が飛び、道化師はよろめいて何事かをうめくようにつぶやいた。

「今何か言った!？」

その顔は化粧に隠され漠然としていたが、ルタミナの知っている顔によく似ていた。それを誰かと確かめたくはなかった。

「ルタミナ」

ぼそりと、ムーザッパがつぶやいた。

「お前がわざわざ怒ることじゃないよ。俺が、俺自身が否定すればいいことなんだから。俺は確かにエレン様に初めて会ったとき体に電撃が走るようなショックを受けたさ。これでもかというぐらいエレン様の夢を見てきたさ。ルタミナにどんなにバカにされても俺はエレン様を見続けてきた。悪い友達に誘われて女性の水浴を覗いても何も感じなかった。エレン様のためになら何でも……死ねることも思った。サイレンの歌にも魅了されることもなかった。

だけど、それはすべて俺のエレン様への想いの激しさの証なんだ！　おい！　道化師！　何が50年後の世界だ。何が時間を超える機械だ。魔法だろうが科学だろうがそんなことができるわけがない。お前のいっていることははじめからインチキなんだ」

「ムーザッパ……キミの体の中には任務を必ずまっとうするようにある機械が挿入されている。時間を逆行させる機械だ。キミがもし何かのアクシデントで命を落とすようなことがあったら自動的に時間を巻き戻すようにできている。もちろん、キミ以外の誰もその機械が作動したことに気づかない。私も気づかない。知っているのは君だけだ」

ムーザッパの顔から血の気が引く。

「知らない。そんなことは知らない。俺はつくりものなんかじゃない。俺の心はつくりものなんかじゃない。俺は人形なんかじゃない。俺は人間だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ……」

火花が打ちあがる。その場にいた人間はその時だけムーザッパの悲壮なつぶやきを聞かなくて済んだ。

ムーザッパは一人、空を見ていた。真夜中の空から明け方の空までをずっと見続けていた。

後ろからこちらに近づいてくる足音が聞こえた。彼はそれが誰なのか音だけで判った。

「ムーザッパ……ここにいたのね」

彼女はムーザッパに声を掛ける。ムーザッパは振り向かない。今の顔を彼女に見せたくはなかった。

「ムーザッパ、あなたは自分の心がつくりものだって思っているよ。うだけれど、それは違うわ。あなたはきっかけを与えられただけ。そこからあなたが育んできた想いは本物なのよ。私はそう信じてる。だってそうじゃなきゃ、他人の……私の心を動かすことなんてできないもの」

「……」

「私、あなたが好きよ」

だが、彼女には別に好きな男がいる。ムーザッパは卑屈にもそう思った。自分の身を抱きしめ、ぎゅっと目をつぶった。涙がにじんでくる。

「ムーザッパ……。私があなたを癒してあげる。同情なんかじゃない。私は他の誰よりもあなたを愛する自信があるわ」

彼女はそっと彼の背中に体を寄せ、小さく愛の言葉を囁いた。

ムーザッパはもう我慢ができなくなった。自分が今一番欲しいもの。それを彼女は与えてくれるというのだ。何で拒むことができよ

うか。

ムーザッパは振りかえった。彼女は慈愛に満ちた笑みを見せた。

それはいとしのプリンセス……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2604n/>

いとしのプリンセス

2010年10月10日20時34分発行